第 22 号
1972.10

書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会

吹田市千里山東3−10−1
TEL 388−1121
内線 776

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

■ 特別寄稿
4 素顔の詩人 田木繁 下程 息

■ 書評
7 「知られざるレーニン」
——遠いあのロシアのガンバリズム—— 阿武洋子
10 フォースターと書斎 上道 功

■ わたしの研究ノートから
16 私の人口論ノート（Ⅰ）
——「優生保護法」改悪論—— 市原亮平
20 日中文化関係史の一面（Ⅳ） 増田 渉
24 ヘーゲル詣で（Ⅰ） 中埜 肇
28 「総有地」と「庶民」
——二つのcommonsについて—— 矢口孝次郎

■ 特別寄稿（資料）
31 田中角栄「日本列島改造論」 小谷節男

2 ■ 巻頭言 ——日中友好—— 奥村郁三
38 ■ 編集後記

題字は網干善教文学部助教授
カット写真は「塑像群像〈収租院〉」より

友好

日本が復交しようとする中国を考えるのに一つの例をとってみよう。中国では「役人にもなれば民衆にもなる」という毛沢東の指示が文革以来特別に強調されている。これは「私心とたたかい修正主義を批判しよう」「幹部は大衆の小学生とならなくてはならない」「破私立公」「精兵簡政」等々表現は異なっていてもつまるところ大衆路線である。「大衆路線」は極めて広範な内容を含み、実体の概念的規定にむしろなじまない。大は国家の内外の政策から、小は個々人の日常のこまかな生活関係も含んだ実践的具体的な政策であり、あらゆる時にあらゆる場所で千変万化した形であらわれなければならない。

「役人にもなれば民衆にもなる」というのもその中の一つである。「幹部は『官吏でもあり、民衆でもあり』身は労働をはなれず、心は大衆をはなれないようにしなければならない」（鞍鋼憲法は社会主義企業の偉大な綱領。冶金部機関プロ革命派大連合委）。このような表現は、単なるお説教でもないし、単なる決意表明でもない。鞍鋼憲法はその中で社会主義企業の管理方針である「幹参一改三結合」をきめた。それは「幹部が集団的な生産労働に参加し、労働者が管理に参加し、不合理な規則・制度をたえず改め、労働者大衆、指導的幹部、技術要員の三者が結合する」（同上）ことであるが、例えば「たえず改める」規則・制度といったこと一つとりあげても、我々の法感覚にすぐに入ってこない。端的にいえば、官僚制に対する全面攻撃であり、深刻な理論上の問題を提起している。実権派はこれに対し「大衆運動（文革のこと）は『わっと起った』もので、『われわれの企業はめちゃめちゃになった』」といった。あざやかな対比ではないか。「役人にもなるし、民衆にもなる、という毛主席の教えに従って、つねに農村に深く入り、大衆と同じように学び、同じ食事をとり、同じ家に住み、同じように労働する」（人民日報他）というのも、修身ではない。修正主義、資本主義との対決の基本的現実的施策であって、国家の安全にまで及ぶ問題である。そうしなければ、ソ連に投降し、アメリカに投降しなければならない。これは従って「革命をやるのか、それとも役人になるのか」（人民日報）というところまでつめなくてはならない。「我々共産主義者は役人になるのではなくて革命をやらなくてはならない」（毛沢東指示）。「役人」は反革命に他ならない。役人＝官僚という怪物は社会主義にとってもやはり怪物である。エンゲルスは「公的暴力と徴税権を掌握して、今や官吏は社会の機関として、社会の上にたっている」といゝ、レーニンはそれを受けて理論上「何が彼等を社会の上にたたせるのか」という。「国家」（企業等を含んで）、これは当然に行政装置を必要とし、行政装置には官僚が必要である。プロ独裁下における「官僚」とは何か。これらのことは、カウツキーに対するレーニンの所論（国家と革命）、革命後のボルシェヴィキ政権の官僚化についてのウェーバーの洞察（浜島訳・権力と支配）等々、著名な二、三の論文をみれば、人間社会にとって「官僚」は極めて重大な論点であることがすぐにわかる。中国の試みは、具体的にもちだされ、その故に実際面でも理論面でも極めて深刻なものとして世界中に提示されている。また、中国の大衆自身にとっては、個々人の意識の底の底まで入ってきた現実

日中

の問題なのである。

五・七幹部学校というのがある。各種各級の幹部を一ヶ所に集め、労働をやらせ学習をやらせる。これも単純な下放と考えてはならない。なるほどやり方は下放である。何故下放するのか。何故ということが理解できなければ単純な強制労働であり、幹部に無益な労働を強いることによって行政も企業も「めちゃめちゃ」になる。五・七というのは一九六六年五月七日の毛沢東の指示である。簡単にいえば、専門家主義を廃し、各人は何でもできなくてはならない。軍事さえ誰でもできなくてはならない。「解放軍は……政治を学び軍事を学び教養を身につけ」、農民は「農業工業を主とするとともに、あわせて軍事を学び、政治を学び、教養を身につけ」労働者は「学生、商業、サービス業、党・政府機関の要員も同じことである。五・七幹部学校はこの指示を受けて作られた学校であるが、むろん役人にもなれば民衆にもなるのでなければ五・七学校ではやっていけない。まさに革命である。こうしたことは誰しもレーニンの「社会主義のもとでは、すべての人が順番に統治するであろう」「すべての人が社会的生産を自主的に管理することを学ぶ」「幹部が『官僚』や『官吏』であることをやめる」といった有名な言葉を思い浮かべるであろう。国家の死滅への道として述べられているのだが、中国は現在「共産主義の高度の段階」に入ろうとしているのではない。中国人は統治しない状態が間近くスムーズにやってくるであろうなどと夢にも思っていない。生産的にはまだ「開発途上国」（喬冠華）なのである。だが、中国は中国における現在のプロ独裁下の社会にみられる具体的な事象から、あらゆる問題提起を行い、現実に対処することによって、社会主義中国を守ろうとしていることは確かであり、今回の文革もその一つであり、実際には終っていない。どんな形で、どんな時期に修正主義が突然あらわれるのか、予測できないのである。

中国人は日々真剣であり、日本はこのような中国と国交を開こうとしている。中国に対する研究も、現在の状況を停止したものとしてとらえ、早急に結論をだし、あわてて断定を下すようであれば、それは研究の俗化に結びつき、無責任な評論にすぎなくなるだろう。少くも三十年、五十年の時期を視野に入れながら現実をみつめる必要がある。中国の歴史は長い時期を視野に入れねばならぬことを教えている。革命直前の社会状態（特に農村）は、基本的にはそのまゝ直接的に十二世紀の社会状態と結びつけて考えられる。そしてその中で生まれた意識・習慣を含めて今だに中国に投影していると考えてよいこと（四旧）がある。それは歴史の、また苦痛の重荷である。国交を開くのは権力と権力との厳たる行為であり、それが双方の利益に合致すれば当然に歓迎されねばならないが、そうした評価に立った上で、さらに相手と友誼を結ぼう（理解しよう）とするなら、ムード的友好ではなく、余程の真剣さが必要であろう。

（法学部助教授・奥村郁三）

特別寄稿

素顔の詩人田木繁（たきしげる）

下程　息

お前らの牛の皮と俺らの頬の皮とどちらが厚いか
お前らの鉛筆と俺らの指骨とどちらが太いか
お前らの指先と俺らの喉笛とどちらが先きに
　　押しつぶされるか
お前らの金を打ちつけた靴裏と俺らの尻っぺたと
　　どちらが堅いか
それをハッキリ呑みこませてやろう

田木繁「耐える歌」より

大阪府立大学の笠松一夫といっても、ドイツ語関係者以外でその名を知っている人は、あまりいないであろう。円い頭は半分禿げあがっており、背は低く、ずんぐりした体軀である。顔色は浅黒く、いつもパイプを口にくわえている。ステッキをついてチンバを引いて歩いている姿など、久しぶりに都会に出てきた、田舎のオッサンといった感じである。とにかく彼をみて誰も大学教授とは思わないだろう。

笠松一夫は実は詩人田木繁の本名である。戦前は、大学卒業後解放運動に参加しながら、『松ケ鼻渡しを渡る』、『機械詩集』等のプロレタリア詩を『戦旗』、『詩精神』等に発表している。終戦後まもなく、ドイツ語教師として大阪府立大学教養部に奉職し、関西大学の非常勤講師にもなった。本人から聞くところによれば、学生は昭和初期のプロレタリア詩の代表作である、彼の詩「（塔間に）耐える歌」　最近では海外でも翻訳されはじめたとのこと　を本学の正門にかかげて、彼の出講を宣伝しはじめた。学校側はこの看板を引っこめるよう要請したが、学生側はおさまらない。ついに当人のところに相談にやってきたが、田木さんはもうこのぐらいでひきさがるよう、暗に云われたとのことである。以来二十年以上、彼は本学の非常勤講師をしたのであった。

笠松先生と私との関係は、私が十年以上前に大学卒業後大阪府立大学に奉職して以来続いている。先生にはじめて出会ったときの印象は、まことに無愛想で茫洋とした人という表現につきる。用事以外にこちらの方から口をきく気にならなかった。当時私は時間割掛りをしていたが、先生が家も遠く足も悪いし、満員電車には乗れないので、よく配慮して分担時間を組んでくれるよう、強い語調で云われたのを今も覚えている。しばらくして私は、同大学の紀要に掲載された先生のリルケ・マンに関する論文を読んだ。読後の印象は何とも云いようのないものであった。これらは緻密な学問研究でもなく、美しく綴られたエッセイでもない。さりとて、論理の骨格だけはそつなく組立てておいてあとは反戦抵抗の歌か信条告白でその空隙をうめあわせるといったていの、当世流のモラルの辻説法でもない。文章がひねってあるので何を云おうとしているのか解らなかったけれども、個性的な力感があった。けれども他面、全体の雰囲気は何か偏執めいていて、重

苦しいのに多少辟易したことも確かである。

トーマス・マンを研究テーマにしている私も、以来先生とときどき話をするようになった。如才がないとはお世辞にも云えぬ先生は、ポツリポツリ口をきかれたが、一語一語が物事に深くコミットした人のもつ精神の重みをもっていた。問題意識の深みがあった。だから何について語っても、文学的直観の閃きが急所をついていた。素気ない調子でする人物批評などまことに辛辣で、ときに対象を冷酷に突き放していたけれども、最後のところではどこか人を包むところがあったので、聞いていていやらしさがなく、ときに痛快であった。そしてまったく偶然のことではあるが、先生の青春以来の親友、いや悪友の井汲越次氏が、口にくわえた煙草の灰をこぼしながら、「笠松君の書くものは、論文よりも詩の方が面白いよ。」と云われたのを聞いて、先生が詩人であるということを、実ははじめて知ったのである。その後、当時の同僚土田修氏に教えてもらって、私は角川の日本文学全集に収められている田木繁の詩を読んだのであった。なお、蛇足ながら彼の全詩業は後に秋山清の世話によって『田木繁詩集』として現代思潮社より出版されている。

私が関大の方へ転勤してからも、毎週金曜日に工学部の講師控室で先生に会った。この日は神戸大の岡村弘氏、神戸外大の小川正巳氏が先生を囲んで談笑しておられた。ここで岡村氏の言葉を引用すれば、「笠松さんという人は静かな人である。人々のあいだにあっても目立たない片隅に坐って自分からはほとんど何も発言しない、そして静かに人々の話に聞き入っている。私はこの人の静けさと謙虚さにひきつけられた。」（『カスターニエン』二〇号、南江堂より）彼らの話題はむつかしい文学論でも、しかつめらしい人生論でもなかった。すべて日常生活の折にふれての感想であったけれども、どこやら文学と人生の機微にふれる、何か生きたものが自然に浮び上ってきたがために、文学的なものが全体に淡く翳っていた。ときに歯に衣をきせぬ言葉にギクリとするようなことがあったけれども相互の敬愛と信頼に支えられていたがために、談話をかえって面白く美しいものにしていたと思う。休憩時間がまたたくうちに過ぎてしまった。時間そのものが停止したようであった。笠松先生はあまり口をきかないけれども、話題がリルケ、マン、サルトル等、創作やアンガージュマンの問題に及ぶと、ポツリポツリ語る先生の言葉が静かななかにも熱を帯びてきたのが印象的であった。

先生は学会的な野心をもっていなかった。シンポジウムでリルケやマンについて報告しても、岡村氏も指摘される通りよく解らなかった。なにしろ明快でなかったことは事実である。先生にこのことを指摘すると、多少はエクセントリックではあったが毅然として次のように云われた。「本来面白くあるべき文学研究のなかには、まことに面白くないものがある。それは作品の周囲をめぐるだけで、その過程のなかに入って、核心をつこうとしないからだ。」

このような自負と自信は、やはり先生の詩人としての自覚にもとづくものであったと云えよう。こう云った意味で先生は自分のために文学研究をされるのである。それだけに一倍文学の勉強をされた。そのおびただしい読書量と努力には、驚くとともに頭がさがった。若いフランス語の先生に助けてもらいながら、ブルースト、サルトル、ケーロールの作品をねばり強く読んでおられた。また中国語の先生に教えてもらいながら、傾倒されている杜甫の詩を再読しておられたし（後に『東西南北の人、杜甫』を図書新聞に連載）、新しい世代の詩人エンツェンスベルガーの作品にも関心を示された。そして私たちのような若いものを相手にするときは折にふれて、多少依怙地にもなって、「俺は年をとっていても気持は若いんだ。君たちはしっかりしないとだめだ。」と自分に云ってきかすような調子で云っておられたのが、忘れられない。

田木繁の文学的情熱と関心のすべてはエンツェンスベルガー的に表現するならば、「反権力的であること、買収されぬこと」という定式のなかに集約されるであろう。彼の告白によれば、学生時代にトルストイ、ドストエフスキーを中心にロシア文学のヒューマニズムより深い感銘をうけて以来、マルクス主義を勉強しプロレタリア運動に入っていった。その昂揚、挫折、再出発が彼の思想に屈折と奥行きを与えているがために、その世界観・文学論は体系的ではないかもしれないが、ヒューマニズムの文学、民主主義文学の可能性の探究という視座からすれば、彼の志操はつねに一貫している。それは彼の世界像の各部分を有機的に結びつける、アリアドネの糸のようなものであろう。それだけに彼はいつも、善意の人を疎外し論理と筋道をわきまえぬ反動的な人々を憎んでいた。けれども、それはけっして感情的・気分的なものではなかった。というのも、彼の文学的使命は現実の世界と自己自身の変革を、本来の可能性に向って開かれた詩的想像力の問題として探究していくことにあったからである。だから彼の右翼憎悪には説得力があったのである。

田木繁は詩人として、マルクス主義の

公式主義化、思想的貧血性、社会主義体制の官僚主義化、コンフォーミズムをつねに批判していた。このような意味においては、彼にとってマルクス主義は、一面、芸術的構想力の問題であったと云えよう。けれども彼は他面、きわめて冷静な現実主義者であった。彼がつねに批判し、ときに痛罵していたのは、現実分析と計画性を欠く小児病的左翼、学生の前ではいい恰好をするけれども、結果的には革命の歌しかうたわぬか、最悪の場合には火事場泥棒のようなことしかできない、えせ左翼特有の幼稚さであった。魂の内発の欲求より生れた真の抵抗が如何にむづかしいかということを、積年の体験を通じて体得していただけに、進歩的な学究に対しては、焦らず図太くかまえてヒューマニズムの曲折した永い道を歩むよう、醇々と云ってきかせていた。私などはいつも叱られてきたし、今もそうである。

このたび岡村弘氏、小川正巳氏を中心に発起人に加わっていただいた先生方の御援助によって、田木繁の詩集『リルケへの対決――垂直的と水平的』が南江堂より出版された。商業ベースには合わない出版を引きうけてくれた南江堂の方々、とくに献身的に協力してくれた高橋正男氏の御厚情もここで銘記しておかなければならない。この本の内容については、小川氏と私があとがきで解説しているのでここでふれる必要はないのであるが、一九七二年六月二十三日の『朝日ジャーナル』の生野幸吉氏の書評を引用すれば「圭角の多い、えぐるような、たたきつけるような反リルケ的文体で書かれた」この著書は、「いわば熱いかなとこの上でたたかれ、詩を書く行為とよじれあい歪みを受けながら生れた」ものである。その全体の心的風景は、存在の審美的内面性と社会的連帯性とが相互に織りなす生のアラベスクであるといってもよいであろう。そしてここにはまた、彼の詩をそのまま借用するならば、「ぎりぎりまで追いつめられた者の、ぎりぎりで立ち直った者の、勇気を新たにして、明日はまた打ちかえす生活の波」がある。田木繁の階級意識はこのような文学的形式でもってここに反映しているように思われる。この本の精神は、本音で歩むことが文学にたずさわる者にとって如何に大切であるかということを、如実に教えてくれていると思う。注目すべきことに、学会と同時に同書の出版祝賀会において大阪外大の八木浩氏は、創作者であるとともに活動家でもある中野重治、久保栄がファシズムの時代に日本文学・文化自体の課題を認識するとともに、ドイツ文学の研究を深めてきたことを指摘されたのであるが、田木繁の営為もこのような視点より検討されることも、研究上有意味ではないだろうか。

けれども他面、私が身近かよりつぶさに観察してきたところであるが、ヒューマンな詩人田木繁のうちには、執拗なエゴイスト田木繁が棲息していた。自分の仕事、とくにこの本の出版にかけた彼の執念はすざましいものであった。他人のことなど眼中にない。人に迷惑をかけようが、どうしようがいっこうに平気である。これには私も小川氏もすいぶん悩まされた。正直に白状すれば、いささか閉口した。この点彼には都会的洗練さなどみじんもなかった。ふだんは何ひとつ言ってこないくせに、自己に係ることになると、うるさいぐらい電話をかけてくる。この場合、私の方が朝寝坊をしていたがためにあまり大きな口はきけないのである。が、寝ているときに起されてうんざりしたことなどしばしばであった。昨年とくに家内の出産と転宅に忙殺されていたときなど、気がたっていただけに、腹がたちもした。彼のエゴイズムにしばしば反撥しながらも、これも詩人田木繁の老いてなおも水々しい文学への情熱のあらわれであることを知ると、腹をたてたのが恥かしくなり、むしろ彼の純心さと誠実さにひきつけられてしまうのである。彼はだから、世間的なことに関してはまことに無神経である。ずいぶん虫のいいオッサンだと思ったこともある。けれどもこれがまた彼の心の余裕となっていたことも確かである。ときに若い人がかっかしてずいぶん失礼な態度をとっても、無関心な態度でもってサラリと受け流してしまうのを、感心しながら観察したこともあった。詩人田木繁にはつねに子供と大人とが同棲しているのである。

今からもう二年前のこと、笠松先生は停年退職を前にして、体の疲れと本務校の残務整理のために、それに何かほかに理由もあって、後期の授業がどうしてもてなくなり、本校の非常勤講師をおやめになった。和歌山県の有田という僻地より四時間近い時間を費して、四コマの教養ドイツ語をもつために、このような詩人が本学に出校していたことなど、もう忘れられているかもしれない。帰宅されるときには、骨の髄まで疲れておられた。見ていて痛ましかった。それで私はいたわりの言葉をかけたのであるが、先生はきびしい顔をしてこう言われた。「このしんどさは君たち若い者には解らんだろう。しかしこれがいつかは詩になるのだよ。リルケの言うように、詩は体験からでないと生まれないのだから。そして物自体が語るようになるまで待たなくちゃならないから。イデオロギーだけで書いた詩は、抵抗力も浸透力もないからね。しかし、創作力が年とともに衰えて

くるのはつらいよ。」

いまさらながら遠いところよりよく来て下さったと思うと、感謝の念でいっぱいである。だが、岡村、小川両氏に週一回会う機会を持たれなかったならば、この本は誕生しなかったにちがいないだけに、二十年以上本学の非常勤講師をされたことも、結果的にはあながち無意味ではなかったと言えはしないであろうか。とにかく、すべてある限度以上においては人間個人の力ではどうにもならぬ、「運命の出会い」の問題となってくるのである。こう思うにつけても、今迄記してきたことすべては、私にとっては人生の貴重な一断面であった。これを「宿命の恩寵」と呼んでもいいかもしれない。

（文学部助教授　したほど・いぶき）

「知られざるレーニン」
N. ヴァレンチノフ著

遠いあのロシアのガンバリズム

阿武洋子

■ロシア革命を尋ねて■

ツァーリ帝政下の「ロシア」は、幾度かの失敗と誤りを繰りかえしながらも、一九〇五・一七年に「革命」という偉大な歴史的任務を手がけました。

ナロードニキ、社会革命党との党派闘争、メンシェヴィキとの分派の中で、鉄の意志と不屈のエネルギーをもって一歩一歩前進を続けていった「ロシア社会民主党（後の共産党）」の努力が、全世界で最初の「革命」を行なわせしめたのです。殊に、その党組織者の一人、ウラジミール・イリイチ・レーニンの冷徹な洞察力と烈火の如き情熱は高く評価するところがあると思います。

革命家レーニンの辿った足跡は、現在刊行されている「レーニン全集」をひもとけば、その概観図を得ることができます。レーニンの、ロシア共産党の、果した役割は階級闘争の歴史上非常に大きいものがあることは常識となっています。評者は、レーニン主義の評価に関して確固たるものを持ってはいませんが、現在の日本の階級闘争の発展のためには、断片的な知識の摂守で事足れりとする考え方を排して、レーニン主義をトータルに把握し、その「精神」を深く学ばなければならないことは、前提的に言っておかねばならないと思います。

混迷と模索を経験しなければならなかった日本階級闘争は、今や本格的な、新しい局面に突入しようとしています。その意味では、新しい息吹きを注入した「レーニン主義」の誕生は切実に待たれているのかもしれません。

■傍にいるレーニン■

ところで、私達、つまり程度と内容の差こそあれ、「階級闘争」の一翼を担う者の中にも、マルクスやエンゲルスに関しても同様、人間としてのレーニンについてその全容を知りたいと思う人は多いに違いありません。

レーニン！　この重い、いぶし銀の様な重厚な響きをもつ、「歴史的巨人」。人間としてのレーニン、という句は曖昧な表現なのですが、当時の一連の政治状況を考慮しながら、彼の政治的活動・生活と彼のもつ性格・気質というものとがどの様に関係しており、どのように相互に浸透しているか、における「人間像」の方に光をあてて考える、というふうに解釈しておきたいと思います。

これに関して記述した書物は確かに多いのではないかと思います。でも残念なことに、彼の性格を深く、具体的に扱っているものは少ないように思われます。

本書は、ロシア革命の最も重要な年である一九〇四年（注・レーニンは一九〇二年に「何をなすべきか」を、一九〇四年に「一歩前進・二歩後退」を執筆している）の時代のレーニンを知り、数多くの接触をもった人々のうちの一人である、N・ヴァレンチノフによる「レーニンとの出会い」という回想記風の評伝です。著者ヴァレンチノフは、時代の中に自らを相対化し、自らの位置を確認した上で示す人間把握の深さをもって、生きた人間群の中で、生身のレーニンという人間を現前させ、レーニンの理論の基底に存する気質に迫らんとし、厖大な数にのぼるレーニン伝が触れ得なかったレーニンの気質を描き出そうとしています。

著者は、熱烈なレーニン派、非妥協的ボルシェヴィキとして、一九〇四年のジュネーブでレーニンと出会い、共に闘い討論を交わし、ついに激突するに至る人物であり、本書は親愛と批判を内にこめて、人間レーニンの真像を語った、比類なき評伝、稀有のレーニン論といえるでしょう。

本書の中で、私達が生きたレーニンの姿を見い出すことはさして難しいことではありません。

彼の顔にあらわれる感情、彼の特徴的な動作を、彼の部屋の家具を眺めるが如くに見つめることができます。また私達は彼の日課の細部、あるいはスポーツや体操に対する彼の興味を知ることができます。そして、体操や登山の愛好者、丘をめぐる疲れを知らない健脚という、レーニンのあまり知られない一面も見い出すでしょう。もっと知的な側面では、レーニンの美的な趣味、彼の好んだロシア音楽、ロシアの古典文学などについて知ることでしょう。

しかし、通俗的にこのようなレーニンの側面を見い出すことは、例えば、レーニンにはいつも政治の事しか頭になく、四六時中、政治方針ばかりしか考えていない、党内闘争屋、というむしろ偏向したレーニン理解に対する反証となるかもしれませんが、レーニンを全体的に理解していく上では、どちらもあまり有効打とはならないと思います。無論、著者は彼自身の性格から、一歩退いてレーニンを観察しており、いわば歴史的反省のような形で、レーニンを描いているのだといえましょう。

とかく、極端な理解を受けがちな歴史上の大人物は、良いにつけ悪いにつけ「不幸」な運命にあるのでしょうか。いろいろな思惑が交錯し、「レーニン」は今や多種多様な糸に絡れ身動きできないのではないでしょうか。

■　オーケストラの「指揮者」■

ロシア革命運動の成長は、ロシア社会民主党というよりも、レーニンの非常に大きなイニシアチブ、稀有ともいうべき人格の力というものが決定的と思うのですが、これはレーニンを抽象的に偉人に仕立て上げるのではなくて、そのような偉人を生み出し得るような根拠というものが、ロシアの革命運動の伝統の中にあったのだということを見るからなのです。

周知のように、レーニンは、ロシアの七〇年代の革命運動を歴史、革命家の生活という面から描いたクラフチーンスキイの著書「地下ロシア」を、ボルシェヴィキの革命サークルの教材に推薦していますが、その中には、ナロードニキ、あるいは特に「人民の意志」派の少数の尖鋭な革命家による鉄の規律をもつ組織、しかも非常に純粋性を求めて強固な意志、情熱でもって、権力とぶっつかっていく姿が生々しい形で描かれているのですが、私達は、こうしたロシア革命運動の伝統の中に、レーニンの徹底した意志主義、勇気と決断力の源泉を見い出せると思っています。

著者ヴァレンチノフは、レーニンの気質をそうした陰謀的革命家の系列にみ、特にチェルヌイシェフスキーの影響が強いと考えています。そして、レーニンはマルクスなしでも十月革命はできたのではないか？　という意見を提出しています。確かに、チェルヌイシェフスキーの小説「なにをなすべきか」の中の、「理想的な革命家像」、そして、「目的が手段を正当化する」、「革命のために、選ばれた指導者のもとに陰謀的、中央集権的前衛集団を組織せねばならぬという思想」、という一連の内容の、レーニンに与えたものは甚大だといえるでしょう。

しかし、私の感想からいえば、レーニンの思想というものは、前記したロシアの革命運動をマルクス主義の科学的理論で止揚したところに成立したのだと思うし、マルクス主義が公認の革命理論として、ロシアの土壌に定着して以後も、合法マルクス主義、経済主義、召還主義と

の闘争の中で、具体的に豊富化していった、その中にロシアの革命的民主主義の伝統のベクトルと、西欧のマルクス主義のベクトルとの質的合成をみたいと思っています。その意味では、著者の後者の意見とはどこか異なるのではないかと考えるのです。

更に、著者は、レーニンの重要な心理的特徴、大きく二つあげているのですが、一つは所謂「指揮棒」をふるう権利は疑いの余地なく彼自身にあるという不動の信念、二つは、激情、極度な精神的緊張の連続、を克明に描いています（本書参照）。何かの本で読んだのですが、その一節に、

「良い司令官は、絶対的に想像を廃していなければならない。なぜならば、想像は一瞬ごとに彼を迷すからである。そのかわりに彼は、彼をいっさいを見るものとなすであろう、冷たい、正確な、数学的洞察力を持っていなければならない」というのがありました。人間の頭脳のなかでこの二つの性質が結合している例は非常にまれにしかみられません。偉大な司令官は数少ないものです。だから、革命の指導者たちの中で、この二つを合せもった人に出会うのはなお更困難だと思います。なぜなら、革命への参加そのものが、熱中とか熱狂とか、信念などという想像力の発達と有機的に結ばれている性質を備えていることを前提としているからです。

こうしたレーニンの心理的特徴を描く著者は、実験用の動物を観察する生物学者の眼をしているのだと思いますが、レーニンの「指揮棒」をふるうという信念は、一人よがりなものでは決してなく、実際的な、現実的裏付け（理論はいうにおよばず、どのような試練にも耐えてやり抜くという構え）をもっていた故に、回りの者を心酔させてしまったのでしょう。人格の「党派性」みたいなものを持っていたと言えば言い過ぎでしょうか。

「できないと言うな。したくないと言え。」（「何をなすべきか」）

「…　ただ、必要な資質を自分にやしないたいという意欲がありさえすればよいのだ！　欠点が意識されていさえすればよいのだ！　革命の事業においては、欠点を意識することは、それをなかば以上訂正したに等しいのだ。」（同右）

自らの欠点、或いは運動の成長に伴なう様々な「病気」に対して、あらゆる角度からそれらを対象化し、良い点は更に伸ばし、悪い所は直していくという、一見平凡な事柄を、本当に現実に即して忠実に実行した点、「原則より実践的解決を！」の精神に、私達も多いに共感できるところがあると思います。

真に革命を目指す者全てに課せられている「何をなすべきか」「次は何か」という切実な問いに対する「誠実さ」を、レーニンは普通の人より強く持っていたに違いありません。「教条」の一切からその基本において無縁であり、徹底して「革命の現実」の側に身をおき、その結果自らの作り上げたものを容赦なく破壊していった「精神」に学ぶ必要があるのではないかと思います。

このような事は、彼の著作の多くを占める「論争の書」、例えば、前出の「何をなすべきか」、「一歩前進・二歩後退」「帝国主義論」を一読すれば、了解できると思います。いわんや、「帝国主義論ノート、農業問題ノート、哲学ノート」や先頃刊行された「国家論ノート」の一ページ、一ページに、レーニンの学究的態度と、前進していこう、という思いを行間にみるような気がします。

著者は、こうしたレーニンの性格に触れながら、レーニンとの決裂の直接の原因ともなった「哲学の論議」について詳しく書いています。これはレーニンの著作では「唯物論と経験批判論」を参照しなければならないのですが、ここではその内容にまで立ち入ることはできません。というのは、この領域は、最も緻密な展開が必要であり、かつまた現在の「哲学」研究の骨格をなしているため、現在の私では論じられません。

さて、私の、本書に対する評は、著者の言いたかった点と幾分食違っているかもしれません。しかし、私は本書の中で、今迄以上にレーニンの考え方、やり方について知ったし、多くの読者の方もそうではないかと思っています。また、「哲学論議」の部分に焦点を当てて読めば、レーニン哲学に対する興味が湧くと思います。

全般的な感想として、訳し方が少しなじめないような感を受けました。

＜参考文献＞

①レーニン全集五巻・六巻その他（大月）
②「レーニンの最後の闘争」（岩波）
③「地下ロシア」（三一書房）
④「ツァー権力下のロシア」（同右）
⑤「構造」（レーニン主義と現代革命・七〇年四月号）
⑥「レーニンの思い出」（青木文庫）

（評者は工学部四回生）
あんの・ようこ

（風媒社・一、五〇〇）

フォースターと書斎

上道　功

翻訳に先立ち、ここに何故私が翻訳を手がけ、何故それに《書斎で》を選んだのか、その理由を少し書いておきたい。

先ずはじめの方の問題であるが、『書評』から執筆依頼を受けたとき、私は翻訳を頼まれたのである。何故私に翻訳がまわってきたのかは定かではないが、私は非常に素直な気持でそれを受取った。この数年、関西大学で語学を担当してきたからである。

次に翻訳にあたり、何故私が E. M. Forster (1879-1970) :《In My Library》(1949), *Two Cheers for Democracy* (London: Edward Arnord & Co., 1951) を選んだのかということに触れておく。雑誌の性格から判断して、また限られた紙面の関係からも、書物、またはそれと深い関係にある主題の短いエッセイを採し、訳し出すことが望ましかったのである。それに翻訳するのなら、これは私自身の好みから、作家の、それも二十世紀初期に活躍した作家の書いたエッセイを訳したかったのである。というのは、Lionel Trilling 教授が文学界の奇妙な現象として《The Function of the Little Magazine》(1949), *The Liberal Imagination* (1950; rpt. London: Secker & Warburg, 1951) の中で指摘している如く、一九〇〇—一九三〇年頃の一流の作家達 (Proust, Joyce, Lawrence, Eliot, Yeats, Mann, Kafka, Rilke, Gide, etc.) はその時代のイディオロギーに殆ど無関心であったからである。フォースターは、前掲のトリリング教授の評論の中で、そういう作家の一人として取り挙げられているのではない。また私が以下に訳出しようとしている《書斎で》というエッセイは、二十世紀の初期、即ちフォースターが小説家として活躍していた時期に書かれたものでもない。フォースターのエッセイは、その大部分が彼の最後の小説で代表作の一つである *A Passage to India* (London: E. Arnord & Co., 1924) 刊行後に、彼が小説家としての筆を折ってから、書かれたものである。しかし、トリリング教授の名著 *E. M. Forster* (London: The Hogarth Press, 1944) に示されているとおり、フォースターは今世紀の初期に知識人の間で高まりつつあった自由主義（リベラリズム）の伝統に組した作家だとは考えられていないようである。この点に関しては、更に Arnold Kettle: *An Introduction to the English Novel*, vol. 2 (Hutchinson & Co., 1935) や、小冊子 Rex Warner: *E. M. Forster* (Writers and Their Work: No. 7) (London: Longmans, Green & Co., 1950) 等を参照されたい。

私がフォースターを選んだ理由はこれだけではない。E. K. Brown 教授は、《The Revival of E. M. Forster》(1944) William V. O'Connor, ed. *Forms in Modern Fiction* (Minneapolis: The Univ. of Minnesota, 1948) の中で、アメリカではフォースターは一九四三年に彼の四つの小説が再版され、五つの小説が全部出揃うまで、そして先出のトリリング教授の『フォースター論』が出るまで *Aspects of the Novel* (London: Edward Arnold & Co., 1927) の著者として以外には殆ど一般に知られていなかったことを指摘している。しかし、母国イギリスでは、フォースターは比較的早くから、即ち I. A. Richards: 《A Passage to Forster: Reflection on a Novelist》, *The Forum*, LXXVIII, No. 6 (December 1927) や Bonamy Dobrée: 《E. M. Forster》, *The Lamp and The Lute* (1929; rpt. Lon-

don: Frank Cass & Co, 1964) において既に十分注目され、一九三八年には、近年再版された Rose Macaulay: *The Writings of E.M.Forster* (1938; rpt. London: The Hogarth Press, 1970) がフォースターに関する最初の評論単行本として出版されるようになったのである。その後、フォースター研究は日を追って盛んとなり、最近では、彼を論する批評家は殆ど例外なく、彼を今世紀に英国が生んだ一流の小説家だと評価するようになってきている。東京大学と横浜国立大学で行なった一連の講義の中で、James Herbert 氏はこう述べたのである。

近年八十才の誕生日を祝ったE・M・フォースターは、過去と最も長い連がりを持った英国の作家の一人であります。（フォースターは一九七〇年六月七日、九十才で死去。）恐らくこのために、一つには、今日文学界から大変敬意を払われているのでしょう。しかし、彼が尊敬されなかった時代を思い浮かべることも難しいのです。フォースターの作品には、その初期のものにさえ、権威の響きがあり、その響きの反響は、彼の最後の小説が出版されて三十年以上も経つ今日でさえ、尚はっきりと聞きとることができるのです。これは確かにただならぬ名声と言えましょうが、この名声はまた、殆ど何の挺入れもなしに続いているのであります。多分衆目を集めているのは、作者の沈黙そのものなのかもしれません。私にはフォースターという作家は、生前において既に、存命中の大抵の作家よりもっと謎に包まれていると思えるのです。大抵の作家が、自分のペースで落着いて仕事に励み始める丁度その年頃に、フォースターが小説を書きやめてしまったことが、恐らく多くの推測を生むのでしょう。しかしこれらの推測は、紛れもなく、フォースターが書いた小説がそれほど面白くないように思える場合には、殆ど何の意味も持たなかったことでしょう。

(James Herbert: *Modern English Novelists* (Tokyo: Kenkyusha, 1960))

日本では松村達雄教授の手になる、近藤いね子編『フォースター』（二十世紀英米文学案内系二〇）（研究社、一九六七）所収の《評価》によると、竹友藻風《英国現代作家—E. M. Forster》『英語青年』（一九三〇年四月）、近藤いね子《The Novels of E. M. Forster》『英文学研究』（一二巻四号、一九三二）、織田正信《E. M. Forster の諸相》『英文学研究』（一五巻一号、一九三五）、西川正身《作品と作者——フォースターの所説を中心に》『エスプリ』（一九三五年一月）「あたりが… 最も早い、かつ数少ないフォースター」論であるらしい。一九三十年（昭和五年）から一九三五年（昭和十年）といえば、横光利一が『機械』（昭和五年）、堀辰雄が『聖家族』（昭和五年）、島崎藤村が『夜明け前』（第一部）（昭和七年）、尾崎士郎が『人生劇場』（青春編）（昭和八年）、谷崎潤一郎が『春琴抄』（昭和八年）、室生犀星が『あにいもうと』（昭和九年）、川端康成が『夕景色の鏡』（『雪国』）（昭和十年）、そして山本有三が『真実一路』（昭和十年）を発表し、芥川賞、直木賞が設定（昭和十年）された時期であったが、それはまた昭和三年に「日本プロレタリア芸術聯盟」と「前衛芸術家同盟」が合同して結成された「全日本無産者芸術聯盟」が、昭和六年の満州事変、翌七年の上海事変の勃発を経て、日々ファッショ化し、険悪な空気が流れ始め、弾圧が強化されていくなかで、遂に昭和九年崩壊していく時代でもあった。このような時代に、フォースターが日本でも注目されるようになったことは興味深い。何故なら、トリリング教授は、『フォースター論』の冒頭でこう書いているからである。「私は長い間、フォースターのことを書きたかった。今それが果せて、大いに満足している。というのも、戦時にフォースターの作品を考察することは、有益であると思うからである。」

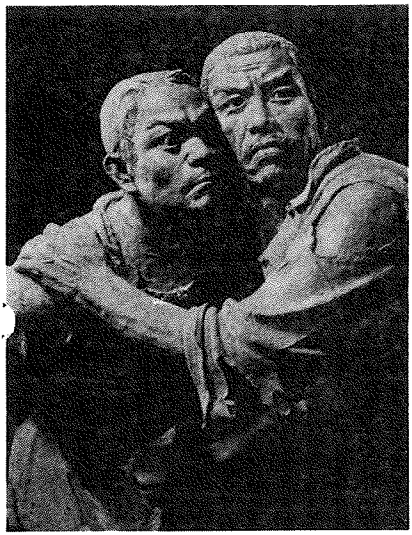
近年になると、わが国においても、フォースター研究はかなり行なわれるようになり、前掲の近藤いね子編『フォースター』の巻尾につけられた《書誌》によれば、一九五十年以降の主だった評論が五十を数えるのである。

だが現在、フォースターは多少過大評価されているきらいがないでもない。Duke Maskell 氏は《Style and Symbolism in *Howards End*》, *Essays in Criticism*, Vol. XIX, No. 3 (July 1969) の中で、この現象を近年の大学におけるフォースター研究の方法論上の不適合性にあると指摘し、フォースターの過大評価を誡めている。即ち、最近の大学では、高度に技術的で分析的な批評が行なわれるため、その対象となる作品とはかかわりなく、近代性や作品の複雑さ、また作家の技法的な拠所、等々が掘り出される。フォースターの場合でも、初期の批評家が見逃していたものの上に立って、近年の過大評価が生まれている。〝作品構成〟、〝象徴性〟、〝リズム〟、〝様式〟等という道具で掘り返せば、掘り返される土地は、殆ど問題ではないというのである。しかし、マスケル氏も認めている如く、これがためにフォースター

の評価は、一段と高まりこそすれ、下がることはない。フォースターに対する現在の評価は、多少割引いて考えてみても、依然として高いのである。短かいエッセイを翻訳するにしても、私がそれにフォースターの作品を選んだのは、彼がこのように高い評価を受けている作家だからである。

更に、そして恐らくこれが私がフォースターを選んだ最大の理由であろうが、この数年、私はフォースターの作品に馴染んできたのである。フォースターの作品が、そして彼の書く英語が、好きなのである。フォースターの持つこの不思議な魅力を Norman Kelvin 教授は *E. M. Forster* (Carbondale & Edwardsville: Southern Illinois Univ., 1967) の中で、フォースターが読者に与えるパラドックス――フォースターは一九三十年代には早くも過去に身を委ね、彼と過去との絆は年と共に強まっていったのに、彼の作品からは現代性が消え去るところか、未来に対してまでも適合性があるように見えてくるというパラドックス――にあると説明している。しかも、こういう姿勢の作家であるから、彼の表現は常に控え目に押さえられ、それがまた、フォースターの魅力を増すのである。それ故に、マスケル氏が指摘しているように、現在フォースターは多少過大評価されているかもしれないが、彼の作品は、今後共読者を失わないであろうし、私も今後ますます彼の作品には親しんでいくことであろう。

以下に訳出した《書斎で》は短いし、それに、フォースターのエッセイの中でも、とりたてて有名でも重要でもない。それを強いて訳出してみたのは、既に書き連ねてきた理由の他に、これが私の知る限り、本邦初訳のはずだからである。翻訳者の私としては、この翻訳によってフォースターの魅力が伝えられたら、幸せである。



《書斎で》

E・M・フォースター　作

上道　功　訳

あなたは遅からず私の書斎に入って来て、やがて出て行く。というのは、私の本の大部分が一部屋に収められているからである。私は更にもう何冊かの本を寝室と、小じんまりとした居間と、それに浴室の戸棚に置いている。だが本の大部分は、いわば書斎と優雅に名付けようとしているところに置かれているのである。この書斎は、わが家う広い一部屋―幅二十四呎（フィート）（七米強）、長さ十八呎（五・五米弱）―で、私の大変気に入りの部屋である。天井は高く、部屋は白い塗りであるが、壁紙は白地に帯状の模様入りで、日が射すと、日光が初期ヴィクトリア朝のゴシック建築の高い窓から射し込んで来る。日が照らない時でも、この部屋は暖かく明るい。南向きだからである。ぐるりと三方の壁に沿って、十二の様々な高さと形の木製の本箱がある。そのうちの二つほどは良い出来映であるが、残りは安物である。部屋の真中には妙な物がある。かつて祖父のものであった本箱である。この本箱は、その前面に二本の曲った木の柱で支えられた少し突き出た棚があり、本箱の背は深々と磨き込まれている。だから何人かの人達は、それが本箱に使われるようになったベッドの枠だというのである。だがその本箱は、そういう恪好で、祖父の書斎の真中に、百年以上も前から立っていたのである―祖父は田舎の牧師であった。だからベッドの枠であろうがなかろうが、この本箱は私の気に入りで、それに独創的でもあるから、私はこの本箱をこれまでからその過去の重みに相応しい、荘重な本で満たそうとしてきたのである。この本箱には、アイザック・バロウの十三巻から成るケムブリッヂ大学の紋章の入った、全モロッコ皮装丁の神学の著作が入っている。

また、ジョン・ミルトンの同じ装丁の五巻ものの著作も入っている。ここにはまた、全子牛皮装丁のイーヴリンの日記、トマス・アーノルドの『ツキジデス』、それにタシトスやホメーロスもある。ここには更に、祖父自身が書いた『古代語一語族』や『自解の書ヨハネ黙示録』、それに『マホメット教解明』というような表題のついた著作が入っている。祖父の著作をお読みになったことがありますか。お読みになったことはないでしょうね。私はどうかですって。読んだことはありません。

当時祖父は影響力のあった人で、このことは私が今持っているささやかな収蔵品から嗅ぎだすことができる。私は存命中の祖父のことを全然知らなかった。祖父はどちらかというと、人に警戒心を起こさせるような人だったに違いない。性格は独断的で厳しく、今では私が無理にもこの祖父に近所付合いを願っている何人かの人達のことを、どうしても褒めようとはしないであろう。というのは、祖父が今立っているすぐ傍の、二つの窓の間にある本箱に潜んでいるのは、祖父とは全然種類の違う人達――アナトール・フランス、マルセル・プルースト、ヘレディア、アンドレ・ジッド――の作品で、祖父が一八七一年、パリ陥落の際に、村人に向かって行なった説教の中で、その祖先を非難したフランス人だからである。だから祖父のもので、私が最も大切に思っているのが、フランスの本であるということは皮肉なことなのである。この本は五十二巻から成る大辞典――一八二五年版の『世界人名辞典』である。その各巻には、祖父の家紋入りの立派な蔵書票（エックス・ライブリス）と、この大辞典の以前の持主、ジェイムズ・マッキントッシュ卿の蔵書票とがついている。この大辞典はひどい傷みようで――背表紙が全部とれているので――あるが、有用な、有閑時に楽しめる参考文献で、すばらしい読みものとなっている。それにこの大辞典には、手際の良さというものが全然ない。この大辞典は世界が変化し始める前の時代から筆を起こしているが、時にはそういう時代に戻ってみるのも良いことである。変化のなかった時代というものは、われわれを落ち着かせてくれる。

私が取り挙げなければならない次の影響は、祖父の娘、つまり私の叔母の影響である。私は叔母の財産を相続したが、現在の住いに完全に落着けるようになるまでに、叔母から受け継いだ本の大部分を売るか譲渡しなければならなかった。しかし、私は自分の一番気に入りの本と、叔母の教養豊かで、魅力的な人格を十分偲ばせてくれるものとは残しておいた。叔母は強い性格の独身女性で、特に長い散文の大の読書家であった。トロロップ、ジェイン・オースティン、シャーロット・ヤング、マロリー、それに健全なヴィクトリア朝の人達の手堅い伝記――こういったものを私は叔母から相続したのである。また鳥類の本も――ビューウィックやモリスのものを――受け継いだ。これらの鳥類の本は、叔母の蔵書票を思い出させてくれる。叔母は楯を中心にしてそれをとり囲んだ葉形飾りの唐草模様（アラベスク）の魅力的な彼女自身の蔵書票を持っていて、その唐草模様からは数羽の鳥と数匹の犬、それにりすが一匹――これらは彼女かもの静かで幸せな、それでいて極めて有益な一生を送った田舎の家のまわりで戯れていた幾種類かの動物なのであるが――そういう動物が顔を覗かせているのである。また、叔母は手芸に興味を持っていた――実際彼女は村で皮細工の講習会を始めたほどである。叔母は自分自身がデザイナーでも細工師でもあったので、本の表紙をデザインし、その製作を行なった。それらの表紙は、製本屋で最後の仕上げを受けたとはいうものの、私の本棚は（われわれは今また本箱の話に戻るのであるが）、そのために叔母の技量のほどを示すいくつかの好例で豊かになっているのである。この本箱には、チャールズ・ダーウィン（叔母は実際にダーウィンと交友であった）の書簡集に、ラスキンの『過ぎ去りしこと』、それに同じくラスキンの『ジョット』――豚皮装丁の見事な見本とも言える本で、ジョットの描いた伝説的な円と、叔母自身の頭文字を教えてくれる本――とが並んでいる。叔母が施工したすべての製本の中で最も野心的なもの――これは『オウマー・カヤーンのルバイヤット』なのであるが――この本は、叔母の死後、東洋人の友達に譲った。私は今でもその美しい本が惜しいし、持っていたらよかったのにと思うのである。だから今でも、叔母がその表紙を飾っていた魅力的なデザインを思い浮かべるのである――それは古代ペルシャの細密画（ミニアチュール）から翻案された馬上球戯（ポロ）の競技者達を描いたものであった――現代の本のカバーは、こういう素晴らしい本の貧しい代用となっている図案（デザイン）にすぎないのである。

しかし私は、私自身が現代人なのであるから、一人で自由に生活を営み、もうこれ以上は先祖の影響力のある人達の間でぐずついていてはいけないのである。それでは、私は一体どんなものを自分の書斎へ運び込んだのであろうか。慎重にしかも数多く運び込んだという訳ではない。私は以前から、一度も本の収集家になったためしがない。だから、初版狂というのは切手収集に非常に近いもの――収集狂にすぎない――と思っている。初

版狂は子供染みていて、書籍愛蔵家を本屋がひき起すありとあらゆる種類のたわごとで煩わせているのである。われわれは絶対に本屋などにつけ入られてはならない。私は自分としては本の中味、本の中に書かれている言葉が好きである――頁の前縁が切られていない本は、そのロが封印されているぶどう酒の瓶と同じくらいわくわくさせるものである――そして、私は良い印刷や良い製本、それに古い本は好きであるが、こういったものは矢張り言葉、即ち人生から滲み出てきて人生を活気づける言葉を補足するものにすぎない。私のこの見解はきっと正しいであろう。でも正しいものにも不利な点があるのは昔からのことで、自分が築いてきた限りでは、私の書斎はいささか混乱していることを認めざるを得ないのである。こちらにある種の本があるかと思えば、あちらに別の種類の本があり、音楽で第五音にあたるような支配的な特徴を十分に打ち出してくれる本がないのである。インドに関する本やインド人が書いた本、近代詩、古代詩、アメリカの小説、旅行記、世界状勢の本に世界国家に関する本、個人の自由を云々した本、美術選集、ダンテの著作並びにダンテに関する本――こうした本が、定期的に取り除かなければいつもできてしまうパンフレットの山のことを度外視しても、お互いに他を圧しようと毒き合っているのである。私に欠けている収集家の本能と慎重な選択が、私の持ち合わせている褒められてもよい関心の多様性と相俟って、そこを訪れる人にこれという明確な印象を与えることのない書斎を作り上げてしまったのである。

また私には蔵書票がない――内気すぎるのか、余りにも面倒だからである。それに私は本をうまく配列することができない。題目別がよいのだろうか、大きさで並べたらよいのだろうか。背の高い古いフロワサールは、『タイムズ地図書』の傍に、それとも小さいフィリップ・ドゥ・コミーンの傍がよいのであろうか。その上、私は当然しなければならないほど、はたいたり吹いたりして本の塵を取ることもないし、皮の背表紙に油をつけてやることもないばかりか、背表紙を一列にきちんと並べるようなこともしない。それで書斎に統制がないのである。僅かに夜間だけ、カーテンが引かれ、暖炉の火がちらちらと燃え、明かりが消される時だけ、本は本来の姿に立ち帰り、一つに纏って威厳をとり戻すのである。だからほんの暫くの間、読書をするでもなくまた物思いに耽るようなことさえしないで、本がその蓄積された知識と魅力とをもって、使われようとしているのであるということを、そして私の書斎が、小さくて不完全ながらも、過去からの立派な個人の書斎を継承してきているのであるということを認識して、本を前に暖炉の光の中で坐っていることは、非常に楽しいことなのである。だがここで、誰かが公共心に満ちた声で「あなたはこれまでに本を貸したことがありますか。」と尋ねることがある。ええ、ありますとも。貸すと、貸した本は返ってきませんが、それでも私は本を貸します。それでは、本を借りたことはありますか。あります。それにそのうちの何冊かは、未だ返さずに、その辺にあります。つまり私は、お互いに不誠実であることに賛成しているのである。だが物の所有権は、確かに私に独特な喜びを与えてくれる。そしてこの喜びは、年をとると共に、ますます増大していくのである。物を所有する喜びとは、それほど強烈なものではないまでも、土地所有欲と同じ類のものである。従って、凡そ一切の所有ということに似て、人間性の根底にまで及ぶものではない。人間の根底にあるものは精神的である。われわれの持つ最も深い欲望は、理解しようとする欲望なのである。そしてそれが、つい先ほど本で本当に一番大切なものは、そこに書かれている言葉――人生から滲み出てくるエキスである言葉――なので、製本でも、活字でも、特定の版が持つ価値でも、蔵書狂的価値でも、また頁の前縁が揃えられていないことでもない、と私が言ったことなのである。

ところで、好みの本というものは、好みが変っていくので、その人の好みのブディングと同じくらい捕えにくいものである。だが私には何といっても、自分の家のどの部屋にも置いておいて、いつでも欲しい時には手を延ばしてとれるようにしておきたい作家が三人ある。この三人とは、シェイクスピア、ギボン、ジェイン・オースティンである。私の書斎には二種類のシェイクスピアがあるが、その他にまだ二種類ある。またギボンは書斎内に一種類、外にもう一種類、ジェイン・オースティンは書斎に一種類と外に二種類置いてある。だから私は、わが家の本の装備にかけては御気嫌である。それに勿論、いくらかトルストイも持っているが、トルストイは各部屋には不必要であろう。シェイクスピアにギボン、それにジェイン・オースティンが私の好みである。だが書斎にいるときは、ギボンのことを一番よく考える。ギボンは本好きであったが、本に支配されるようなことはなかった。本の使い方を知っていたのである。だからギボンの胸像が、祖父の慣慨にも拘らず、祖父の本棚の上に立っていたとしても尤なことであろう。

（*Two cheers for Democracy*・金星堂）

邦文・邦訳文献

――単行本のみ――

《作　品》

田中西二郎訳『印度への道』（新潮文庫、昭和二七年）一四〇円。

吉田健一訳『ハワーズ・エンド』【二〇世紀の文学・世界文学全集№16】（集英社、昭和四〇年）五二〇円。

鈴木幸康訳『ハワーズ・エンド邸』（八潮出版社、昭和四二年）四八〇円。

荒正人訳『天使も踏むを恐れるところ』、小池滋訳『ハワーズ・エンド』【『フォースター』新集世界の文学№28】（中央公論社、昭和四五年）三九〇円。

村上至孝・米田一彦訳『天国行の乗合馬車・永遠の瞬間』【英米名作ライブラリー】（英宝社、昭和三二年）三〇〇円。

大沢実訳『天国行き馬車・永遠の瞬間』【双書、二〇世紀の珠玉】（南雲堂、昭和三二年）五八〇円。

米田一彦・中川努訳『社会・文化・芸術』【現代作家対訳双書№20】（金星堂、昭和三七年）三五〇円。

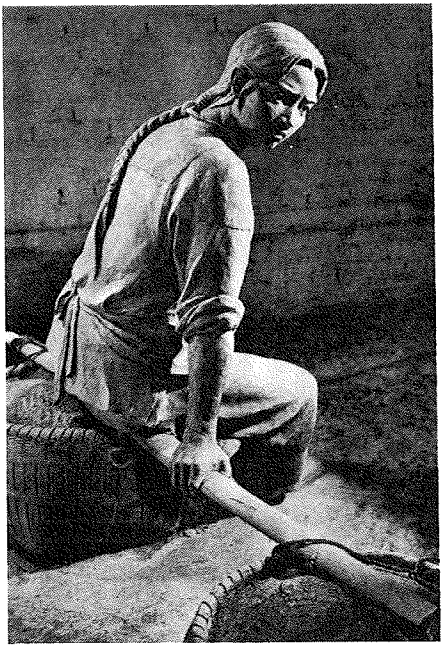
米田一彦訳『新訳、小説とは何か』【現代小説作法シリーズ】（ダヴィッド社、昭和四四年）三四〇円。

《批評書》

レックス・ウォーナー著、多田幸蔵訳『E・M・フォースター』【英文学ハンドブック――「作家と作品」№5】（研究社、昭和三二年）一五〇円。

近藤いね子編『フォースター』【二〇世紀英米文学案内№20】（研究社、昭和四二年）四八〇円。

（関西大学非常勤講師　うえみち・いさお）



私の人口論ノート I

「優生保護法」改悪論

わたしの——研究ノートから

市原亮平

先ごろの第六八国会の終り頃、厚生省から提出された優生保護法改正案は、継続審議となって次国会にもちこされた。一部宗教団体や経済界の要求に答えようという政府与党は別として、野党が筋のとおった反対論も反対運動も組織していないのはうなづけない。おそらく改正案の是非をめぐって男性と女性とが闘うのは、政府与党と野党とが闘わないことの代償行為となるのだろう。以下この改正案の政策意図と反対論の論点とを紹介し私見を裏打ちしたいと思う。

(1)

改正案の主眼点は姙娠中絶の認められるケースとして現行法では「姙娠の継続、または分娩が、身体的または経済的理由により、母体の健康を著しく害するおそれのあるもの」となっているのを、「経済的理由」を削除し、あわせて「母体の健康」とあるのを「母体の精神または身体の健康」と改めたことにある。優生保護法が戦時下の「国民優生法」を新憲法下の戦後日本に適応させて改廃・制定されたのは昭和二十三年のこと、翌二十四年にインフレや食糧難などから「経済的理由」が追加され、現行法に改められ現在にいたっている。もちろんこの間、日本経済は破壊と病弊から立ち直り、三十年代の高度経済成長をふまえ、いまや経済大国になっており、「経済的理由」のような個々の産婦人科医の経済学的判断に中絶の決定権をゆだねるような規定をもつ、算術医に奉仕する「中絶天国」のザル法を改め、幼い生命を尊重するというタテ前には表面的に首肯できないこともない。しかし、この表面の衣の下には経済界や一部宗教界の底意の鎖かみえて出生率と国益にからむ旧時代感覚が露呈してやりきれない。

今回の改正案提出でもっとも動いた玉置和郎参議院議員はこういっている。

「まず経済的理由を除外したのは、生命を経済的モノサシではかれぬという考え方もあってのことです。要するに世界的には中絶に対するチェックをなくそうとする傾向にあるが、日本は逆にそれに歯止めをしたわけだ。〝野放し中絶国〟の例に挙げられてきた国としては妥当な行き方だと思っていますよ……」

宗教団体をバックに「優生保護法改正」を公約に打って出た玉置氏が、初当選後「優生保護議員懇談会」を結成し（四三年十月十八日）、これと前後して「生長の家」とカトリック医師会を中心に「優生保護法改正期成同盟」ができ、これら倫理運動に押されて厚生省の姿勢も定まった。中絶禁止を推進する理由としては(1) 母体の危険性、(2) 生命の軽視、(3) 性モラルのびん乱、のほかに同期成会は人口減少が若年労働者を減らし民族滅亡の原因となることを力説したのが注目された。人口中絶→人口減少→労働力不足→経済・民族の衰退、といった短絡段階説が政治家や厚生省官僚にも表白されていく。

四五年四月二日、野原労相は参院予算委員会で「日本経済が大きく成長し発展するには何としても、やはりそれと見合うだけの働く人たちの力がなければならない。結局は、人口問題についてご検討いただかなければならない段階がくるであろうと考えております。」と自民党議員の質問に答えている。昭和三十年代に進行した神武以来初めての労働力不足状況が経済界に戦前の低賃金労働力過剰時代への郷愁をよびおこし、財界が児童手当にしめされる、福祉に先行する人口増加策への旋回を実現しようとしたのはあきらかであろう。この人口膨張政策の予兆にたいし、識者が反対意見を表明していったのは当然であった。

(2)

敗戦直後の優生保護法の立法化に活躍した太田典礼博士はこの改正案は「改悪」であると批判する。――「子供ができると暮しに困る、といえば中絶できたのがこれからは医者の考え方一つで左右されることになった。このようにワクを作って縛れば縛るほど、非合法の中絶が横行し、事故が起るようになる。母親の意志さえあれば、合法的かつ安全に中絶ができるという道を残しておくのが本当ではないのか。大体、基準的には、こういうことを法律で規制することにすら問題がある。」日本母性保護医協会は、四五年三月、自民党社会部会がこの改正問題をとりあげた直後、優生保護法の検討はとくに慎重におこなうよう要望したが、その理由は次のようであった。

① 中絶を法律で規制すれば「ヤミ中絶状態」に戻り母性にかえって危険。

② 失敗のない受胎調節指導、未婚者への純潔教育、安心してこどもを育てられる社会福祉政策こそ抜本策。

③ 世界各国の大勢に反する人口増加策は時代逆行。

国立遺伝学研究所の松永英、木村資生両部長の改正反対論も、母性保護医協会の右の論点と重なっているが、とくに注目をひくのは、現行法が家族計画の手段として利用され、「人口学史上画期的な結果」をもたらし、人口問題解決の有効な手段であるのを実証した、と主張していることである。

日本家族計画連盟も反対声明を出すがそれによると、

中絶をうける最大の動機は住居・教育費・物価等の「経済的理由」からであり中絶は国民のこの不安定な現代生活に適応しようという生活の知恵にほかならない。その代りの「精神的理由」はこれをはかる尺度がないだけに、運用によっては際限なく狭くなり、また広くもなる。前者の場合には中絶手術料は数倍にハネあがり、そのため両親に望まれないで生れる子、あるいは私生児がふえ、「人間の基本的人権である出産に、政治権力が介入するおそれがある。」

(3)

河合武編「人類の行方」（みすず書房刊）をよむと、すべての生物は進化の原動力であった「自然淘汰」「適者生存」という生物＝自然法則の作用下にあるが人類は文化発達のなかでこの自然法則から脱却し、不適者も生存できることとなった。その結果、悪い遺伝子がふえ蓄積されてゆき変異がおき、人類に致命傷をあたえようとしている、と終末観が述べられている。さらに現代資本主義になると社会福祉や産児制限や合法的中絶が不適者をますます生存させ、悪い遺伝子を蓄積し、いわゆる「逆淘汰」がおきて人類文明は変質と破局をむかえる、というのである。この人類の破局をまぬがれるため、われわれはふたたび自然淘汰と適者生存の放恣な作用下に人類をおき、弱肉強食の修羅相を現出すべきであろうか？

淘汰作用をそのまま人類・民族にあてはめ、国家・民族を改造・優化させるため組織的人為的に淘汰をおこなうというイデオロギー、これはまさに「社会ダーウィニズム」である。

二〇世紀帝国主義の屈強なイデオロギ

ー「社会ダーウィニズム」に先行しそれを支えたのが「優生学」である。これを創めたのはダーウィンの従弟ゴールトンであり、ダーウィンが晩年おちいった陥穽――自然淘汰説の人類への適用という偏りを一面的に強調し、人類の遺伝を重視し、淘汰説を意識的に適用して人種改良をおこなおうと志したものである（一八八三年の「人間能力の研究」以来）。優生学は国家主義に利用されると猛悪な存在となり、国家目的として断種政策の基礎づけさえおこなうのであり、ヒットラー・ドイツの「民族衛生」は人種や人間の優劣がすでに受精卵中で決定づけられており、民族や個人の才能や性質が環境と切り離されて先天的遺伝のブールによって予め左右されるのだという粗野な予断に立っていた（優生学はメンデル法則の発見以後、遺伝法則説との結合を強めていく）。ヒットラーはこの予断に立って、一九三三年に断種法を制定したのであるが、この襲みに倣って日本も昭和十五年五月に公布したのが「国民優生法」であり、これを敗戦後の新憲法体制下で換骨脱胎したのが一三年のいわゆる「優生保護法」である。

(4)

厚生省人口問題研究所、人口資質部長篠崎信男氏は「日本民族の質は低下している」と警告し、日本人は体力も知能指数もともに戦前（とくに徳川時代）の地域・階層的な淘汰のさかんだった時代の方がすぐれていて、戦後の社会福祉や産制・中絶の盛行はますます淘汰を抑制し逆淘汰をおしすすめ、欠陥人間をふやしていると嘆いている（週刊現代、四五年六月号）。これに前後して厚生省の諮問機関「人口問題審議会」は四年半を費した答申「最近における人口動向と留意すべき問題点について」をまとめたがそこでも日本人の人口資質（人間集団としての遺伝的素質・性格・知能・体力等の各種の属性をいう）の低下論が叫ばれていて優生対策が説かれており、前年の中間答申の強調点がわが国人口の純再産率（一人の女子が生涯に産む女児数の中から死亡者を差引いたものの平均値）が西欧に例をみないほど低く、十年間、一を割りつづけていることへの警告にあったことと、まさに前後符節を合している。

篠崎人口資質部長や香川健一が日本人質的低下論の指数的根拠として引き合いに出す知能指数を左にしめすと、

	国民平均的知能指数
昭和13年	105.01
28年	102.08
30年	96.35
33年	104.85

しかし戦後日本にもなお残存する、こういう優生学的アプローチ、知能テスト万能主義にたいし、国立教育研究所成田克夫氏の「知られざる大改革」（日経、四五年三月二日）は項門の一針を与えている。イギリスの伝統的能力観は悪評たかい十一才試験に約現されるが（イギリスの頑固な階級差別主義の最後の要塞としての教育差別主義）、これはそれを支えた知能テスト信仰とともに中等教育の総合制化・機会均等化をつうじて廃棄されるといういわゆる「大改革」が進行中だというのだ。

ロンドン大学教授で知能理論の最高権威の一人バーノンや、国民教育研究財団ワッツ博士の実験によって、知能指数は予備指導で大巾に変動すること、レスター大学サイモン教授はこどもの知能は先天的に決っているのでなく、著しく後天的環境、とくに家庭と学校の性格やそこでの教育のあり方によって左右されることを実証的にあきらかにし、大反響をよんだという。

頑固なスペンサー主義は衰傷国イギリスだけでなく、革命後のソヴィエトにも生きていた。十月革命の十年後、第一次五カ年計画の開始時に、ソヴィエト遺伝学者セレブロフスキーは国内に人間交配所をもうけ、優良な人間を交配すると五カ年計画は二カ年半でやりとげられるといったが、スターリン批判・ルイセンコ失脚後の今日のソヴィエト遺伝学者は、セレブロフスキーのごとく遺伝子万能の悪論も吐かなければ、ルイセンコのごとく実質上遺伝子概念をまるごと否定しもしない。現在ソヴィエト・アカデミーの一般遺伝学研究所長であるニコライ・ドウビーニン博士はいう。――「優生学者は畜産家が家畜の優良種を作るのと同じやり方で人間の遺伝に干渉することを提唱する。だが、これは道徳的見地からは許容できないし、遺伝学の現状からみて成功の見込みがない。」「人間社会では……目然淘汰は行なわれないので、多くの突然変異が次の世代へと伝えられ、遺伝の重荷となって人々の肩にのしかかる。……人間は誰でも、その構造に欠陥のある遺伝子を五～一〇個程度もっているのだ。」（「今日のソ連邦」六九年五月号）

(5)

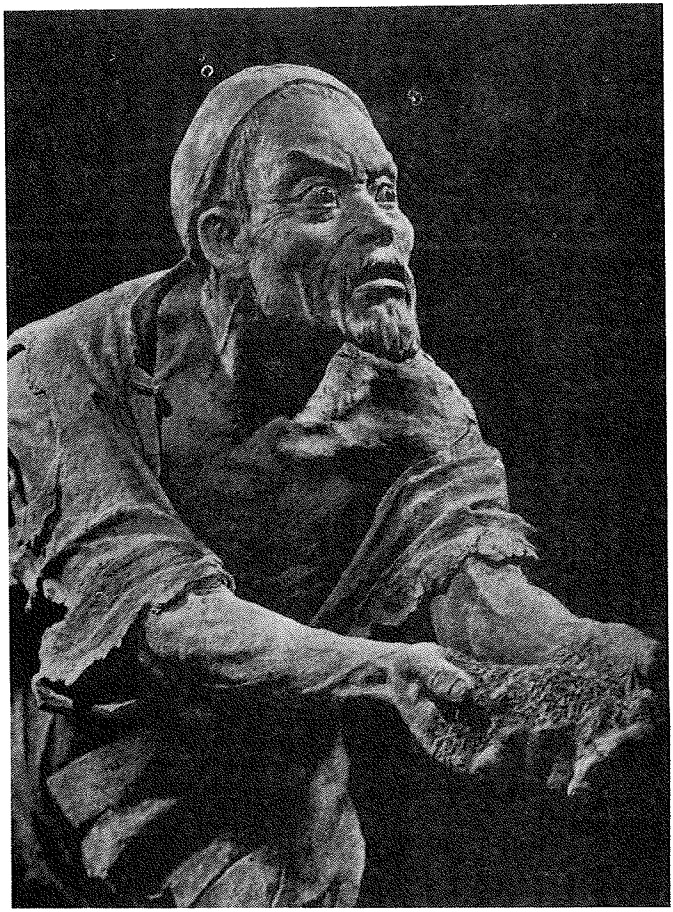
今日世界人口の半数以上が中絶を合法化している国に住んでいるといわれ、中絶合法化は世界の大勢であって、この故にこそ松永・木村両氏意見書が「日本の優生保護法は人類の未来を先どりした政策であった」と述べている所以でもあろう。「経済的理由」を個々の医者の決定にゆだねるのは論理の筋からはおかしい

が、現行法はこの理由規定をもつ故にこそ、アジアの発展途上国がうらやむほど短期間に、家族計画を普及する有力な手段になりえたし、生活保護世帯やボーダーライン層の手術代が無料の恵みに浴しえたのである。これを削除することは中絶手術の有料・算術化につうじ、労働力不足の緩和を切望する企業目的に即応し世界の大勢に逆行して姙娠・出産の自由権を女性の手から算術医に移しかえるという、あたらしい女性差別立法にくみすることになろう。

しかし、すでにふれたとおり、改正反対論も全部の論点がまるごと首肯できるとは限らない。反対運動の急先端となったウーマン・リブの女たちは、陳腐な男女の階級闘争観を披瀝してはみせるが、女性差別の張本人が今日ではもはや従前の家父長でも家族国家でもなく、まさに現代独占資本主義したいであることを正視できないでいる。松永・木村意見書は中絶合法化が人口問題解決の有力な手段であると思いすごしておられ、現行法を支えている危険な優生学イデオロギーには気づかれないごとくである。

われわれはこの際、「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」とうたわれている現行「優生保護法」の歴史にしめされる、ナチス・ドイツ渡来の「血の純潔」・民族衛生イデオロギーに着目し、現行名称を他の国々のごとく「中絶法」にかえるとともに、法文内容に盛りこまれた優生学的思考をいっさい払拭すべきであろう、と思う。

（経済学部教授　いちはら・りょうへい）



日中文化関係史の一面

（Ⅳ）

増田　渉

わたしの研究ノートから

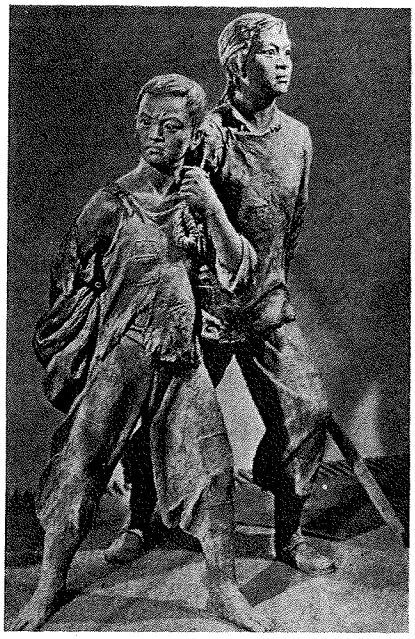
柳河春三の著とされる『横浜繁昌記』という木版本一冊がある。「喫霞仙客校本、暮天書屋蔵板」と扉にあり、太平逸士と錦溪老人の序詩がある。だが本文になると、首めに「錦溪老人著、太平逸士校」となっている。戯著であるから仮名を用いたもののようだ。出版年月はどこにも見当らないが、文久ごろに書かれたものではないかと考えられる。桂川邸に於いての談笑を書いたという「天香社会話」（未見、写本）などとともに、この『横浜繁昌記』も「喫霞楼新六々部集」と名づけたもののなかに入れられているというし（尾佐竹氏による）、大たい文久ごろと推定される。尾佐竹氏の「柳河春三略年譜」では『天香社会話』は文久元年の著となっているからである。

『横浜繁昌記』は漢文で書かれているが、普通の漢文とはちがい、中国の古い小説類に用いられている文字も混ざっていて、「那個」「不好了」「刮落的」「難道・・不成」「那話児」等の、所謂「俗語」がところどころに見られる。また清末からアメリカの代名詞になった「花旗」（星条旗のこと）という文字もつかわれている。前にふれた柳河たちが「的」字を中国の小説文章から取ってきたということも肯けるわけだ。

さて、この『横浜繁昌記』のなかに、「舶来書籍」の項があって、「近今、英・米二国、務めて漢学を修め、香港・上海等の処に在って、刊する所の漢字の著書頗る多し。（中略）莫利宋（モリソン）・林則徐の著わす所は更めて論ぜず、新出の書目、推歩（暦算）には『談天』『数学啓蒙』『代数学』『代微積拾級』『幾何原本』、格物（科学）には『博物新編』『重学浅説』『格物窮理問答』『智環啓蒙』、刀圭（医学）には『全体新論』『内科新説』『西医略論』『婦嬰新説』、広輿史乗（地理・歴史）には『瀛環志略』『地理全志』『地球説略』『万国綱鑑録』『大英国史』『聯邦志略』、新報記事（新聞雑誌）の属には『遐邇貫珍』『六合叢談』『中外新報』『上海新聞』等」といい、当時、中国から舶来された書籍、新聞雑誌をいろいろあげている。だが最後のところに「老人未だ多くこれを目撃せず、姑く耳聞を録して、以て看客の参考に備ふるのみ」（以上、原漢文）といっている。

「耳聞」を録するというのだが、この種の中国舶来の書籍・新聞雑誌は、新知識を求める人たちの間の話題であったことが知られるわけだ。

マテオ・リッチが明末、万暦年間（一五八三年とされる）に中国（広東省肇慶）にもたらした『坤輿万国全図』や、それよりややおくれて中国に来たイタリア人宣教師、艾儒略（Julius Aleni）の『職方外紀』（漢文）は、中国に世界地理の知識をひろめたが、この書はまた江戸時代にわが国にも入って、世界地理の知識を伝えた。ただこの書は、明末に李之藻が編集した『天学初函』（天学は天主教学の意味）に収められていたため、寛永年間の「禁書」の中に入れられていたが、「貞享五年ニ至テ邪法ニ干係セザル品ハ其禁ヲ弛（メ）ラル」と近藤正斎（書物奉行）が『好書故事』巻七四の「禁書」一の項（国書刊行会本『近藤正斎全集』第三所収）にいっているように、また「禁書ノ中、前々長崎ニ於テ弛禁発



舟ノ書」の中に『職方外紀』もあげて、「享保十六丑年、唐船持渡候「皇朝職方地図」之内ニ有之、商売被仰付候」と注しているように、後では商売も認められわが国にも入ったようだ。

だが宣教師の著述であるし、また最初は「禁書」になっていたためか、商売の禁は弛められたものの、翻刻は出ていない。「禁」を弛めたというだけで、翻刻して弘通することまでは許さなかったものか。刻本はないが『職方外紀』は写本で、かなり広く読まれたようだ。そして世界地理の知識を、当時のわが国に紹介し、啓蒙したことは少くなかったといえよう。この方面の研究者であった故鮎沢信太郎氏は、文化、文政、天保等の『職方外紀』写本を、八種も所蔵していたというが（『鎖国時代日本人の海外知識』昭和二年、乾元社）、私も査べてみたら同書の写本四種を手元に所蔵している。この書が当時、広く写本によって伝播していた証拠だといえる。

『職方外紀』は艾儒略の自序に、天啓三年（一六二三）の記年があるが、わが国にやや広く伝えられたのは江戸末期であるようだ。一方また幕末ごろになると直接オランダの数種の地理書を参考に、蘭学者がさらに新しい世界地理書を著述した。箕作省吾の『坤輿図識』三冊（弘化二年）、同補四冊（弘化三年）、箕作阮甫の『八紘通誌』六冊（嘉永四―安政三年）などがあり（但、後者は「欧羅巴部」のみ）、またアジア部の一冊だけで続篇は出版されなかったが、英文（Colton 原著）から訳述した「佐波銀次郎訳手塚律蔵校」の『格爾屯氏万国図誌』（文久二年）などがあった。以上はいずれも私の所蔵に属するものだが（中国がどのように取扱われているかを見るために買った）、この他になお多くの欧文に拠った世界地理書が、その前後に出版されている（詳しくは鮎沢信太郎・大久保利謙『鎖国時代日本人の海外知識』を参照）。

これらの中で、清末に上海に在留した英人宣教師、慕維廉（William Muirhead）の『地理全志』（漢文）の翻刻も、当時のわが国の人たちに、かなり体系的な世界地理・地誌の知識を伝えたものといえよう。この原本はもたないが、私の所蔵するものは「安政巳未（六年、一八五九）新刊、爽快楼蔵版」の訓点翻刻本で（安政五年新刊とする同版もあるというが）、上篇五冊、下篇五冊の計十冊本である。上篇は「亜西亜志」「欧羅巴志」「阿非利加志」「大洋群島志」の各冊に分けられ、下篇は巻一「地宜論」、巻二「地勢論」、巻三「水論」、巻四「気論」、巻五「光論」、巻六「草木論」、巻七「生物総論」、巻八「人類総論」、巻九「地文論」、巻十「地史論」が五冊に収められている。巻末に「発弘書林」として「日本橋通一丁目、山城屋佐兵衛」となっているが、これが当初の出版元かどうかは知らない。訓点者の姓名は記されていないが、巻頭に「安政五年秋九月」の塩谷宕陰（世弘）の序がある。塩谷宕陰は漢学者で、また海外事情に関心をもち、海防に熱心であった。とくに中国のアヘン戦争の情報を収集して、わが国の危機を警告した『「阿芙蓉彙聞」』『隔靴論』『籌海私議』などを著わした人である。

宕陰の序文では『地理全志』を「海国図志」および『瀛環志略』（両書はともに翻刻があり、後述する）に比べて、「『図志』は雑に失し、『志略』は事蹟を主とし、みな未だ方輿を悉す能わず」（原漢文）といい、此書は「国朝（日本）を記して、多く疎繆」はあるが、「蓋し簡にして括、劉覽三日にして、ほぼ五州の大勢を瞭かにするに足る、地理を講じる者、安んぞこれを以て捷径となさざるを得んや」といっている。そして最後に「頃者、蟾州（ケイシュウ）巖瀬君、貲を捐してこれを刻し、鄙言を徴せらる、辞せんと欲して能わず」といって、蟾州巖瀬君が自分の金を投げ出して、この書を翻刻させ、そして序文を求められたといっている。

蟾州巖瀬君というのは、幕末の外国奉行（はじめ目付）の岩瀬肥後守（忠震）

で、蟠州はその号である。岩瀬はかねて外国事情に留意し、とくに幕末に日本の開国方針を堅持して、はじめ攘夷説に傾いていた幕府の外交を、開国政策に転換させた人といわれる。福地桜痴（源一郎）の『幕末政治家』（明治三三年、民友社）には、岩瀬肥後守を「幕末の三傑」の一人にあげて論じている。とくに岩瀬等幕府役人が、米使ハリスの起草した通商条約案文を、ハリスと逐条審議したとき、「岩瀬の機敏なるや、論難口を突いて出で、往々ハルリスをして答弁に苦しましめたるのみならず、岩瀬に論破せられて其説に更めたる条欵も多かりしとは、これ余（福地）が後年米国に於いて、親しくハルリスに聞きたる所なれば、以て岩瀬が才量を知るに余りありとす」と福地はそのなかにいっている。

だから岩瀬は当時の条約反対派が、海外の事情を何も知らないまま、ただ閉鎖主義の攘夷説を固執するだけであるのを見て、慨嘆し（このことは彼の手紙に見える）、このような書籍を刊行することによって、蒙を啓こうとしたものと考えられる。そのような政治的・外交的配慮もあっての翻刻だと考えられる。

『橋本景岳全集』（昭和一八年、敵傍書房）のなかの『景岳詩文集』に、橋本左内の『読「地理全志」書其後』という詩がある。これは安政五年十二月の詩と考えられ（日付のあるその前後の詩から推して）、左内の幽禁中のものだ。岩瀬が翻刻した『地理全志』には、「安政五年秋九月」の宕陰の序があるから、この書を翻刻して、岩瀬が左内に贈ったものを読んだのであろう（安政三年の奥付がある『地理全志』もあるというが）。岩瀬は幕政を改革し強力なものにするため老中（堀田）の、後には大老（井伊）のもう一つ上に、徳川の一門で名望のあった福井藩主、松平春嶽（慶永）をもってこようとした。この点で春嶽の側近、橋本左内と密切な関係をもった。また左内も岩瀬と同じく開国論者であり、この点でも両者は結ばれていた。そして反幕府の左内は、また岩瀬から幕府内部の種々の情報をとっていた。岩瀬と左内とのこのような関係は、『橋本景岳全集』に収められている岩瀬の左内宛書簡二十余通が証明している。また両者の国事奔走の密切な関係は、中根雪江（師質）の手録『昨夢記事』（雪江没後、明治二九年出版、勝海舟序、八尾書店）のなかにも詳しい。雪江は左内とともに松平春嶽側近の両翼といわれた人だけに、当時、機密に関することにも通していた。

なお、岩瀬が左内に宛てた安政五年四月二十日付の手紙の二白に、「『瑕瀰貫珍』拙蔵有之候間、若し御一見にも相成候はば、御沙汰次第差上可申候間、御序に御伺置可被下候」といっているが、「『瑕瀰貫珍』というのは、外人宣教師が香港で発行していた月刊ニュースの漢字誌（一八五三年創刊）で、一八五六年（安政三年）までつづいたという（弋公振『中国報学史』による）。これは『六合叢談』などのようにわが国で翻刻されなかったから、大てい写本で伝えられているようだ（私も三号分くらいの写本のコピーを所蔵）。だが当時やはり、発行年月は少しずれながらも、多少は現物が入っていたようで、十数年前、古書店の目録で一度見かけたことがある。吉田松陰などもこの雑誌を見ていて、安政四年九月二日、松陰から長原武に与えた手紙に、「『瑕瀰貫珍』難有拝受仕候」といっている（明治四二年、民友社発行『松陰先生遺著』第二編『書牘雑輯』所収）。また同年十一月二十四日の『跋伊沙菩喩言』に、かって松陰は『イソップ物語』のなかの『馬と鹿と同遊』（漢訳）の話を、『瑕瀰貫珍』で読んだといっている（明治四一年、民友社発行『松陰先生遺著』所収『幽室文稿一』）。

岩瀬は外国奉行であったし、海外の事情に関心をもち、この種の雑誌も収集し、目を通していたのであろう。なおこの手紙に『御序に御伺置可被下候』というのは、左内の主人、松平春嶽に『御沙汰次第』差上げるから、ついでのとき伺っておいてくれといっているのである。

ついでに附け加えると、『地理全志』の著者の慕維廉を、文久二年に幕府の貿易船、千歳丸に乗組んで上海に渡った高杉晋作は度々訪ねている。このことは高杉の『遊清五録』（大正五年、民友社発行『東行先生遺文』所収）に見えるが、五月二十三日朝、五代（才助、後の友厚、大阪商法会議所初代会頭）と『英人ミュ（ママ）ルヘットを訪う、ミュルヘットは耶蘇教師、耶蘇教を上海に施す、城内教堂（は）ミュルヘットの所関（管）也、ミュルヘットの常居する所…『聯邦志略』等の書を需めて帰る』とある。また二十五日朝も五代とともに訪ねるが、そのときは不在といっている。二十七日には中牟田（倉之助、後に海軍中将、海軍大学校長、軍令部長）と『ミュ（ママ）ルヘル（の所）に至り、『上海新報』『数学啓蒙』『代数学』等の書籍を需めて帰る』といっている。『数学啓蒙』『代数学』は前にもふれた偉烈亜力・李善蘭による著述である。六月二十六日にも中牟田と訪ねるが、不在といっている。

中村孝也著『中牟田倉之助伝』（大正八年、非売）は、中牟田の手記を多く利用して書かれたというが、その中で『上海渡航』を記したところに、中牟田は『

六月十二日、英人ミュールヘッドを訪ねしとき、長髪賊（太平天国）著述の書、四冊を借用し」「翌日の日記に終日写本とあり」といっている。このころ太平天国の一派、小刀会系の反政府軍が、上海近郊を占拠していて、上海ではその情報が乱れとんでいたときだ。また五月二十七日、中牟田は高杉とともにミュールヘッドを訪い、高杉は前記の「上海新報」（「太平天国」のニュースをのせていた）「数学啓蒙」「代数学」等を購い、中牟田も書籍を求め、先に（二十五日）同人著述の書を贈られた返礼として、扇子や錦綵等を贈った云々と中村は書いている。

慕維廉のどの著述を中牟田が贈られたか具体的には記されていないが、別に中牟田の「上海渡航記事」を引用して、中牟田が上海で求めた地図、書籍の目録をあげたところに、慕維廉の著「地理全志」や「大英国志」も見えている。だから贈られたというのは「地理全志」「大英国志」（これは既に文久元年、訓点翻刻本が出ている、後述す）の類であったろうと考えられる。あるいは高杉の「聯邦志略」（これも後に翻刻本が出た、後述す）等の書を需めて帰る」という「等」のなかに「地理全志」もあったものかどうか。

高杉や五代や中牟田がキリスト教会堂に常居する慕維廉を訪ねたのは、キリスト教そのものを求めたとは、勿論考えられない（当時は国禁）。彼等と同時に上海に渡った納富介次郎の「上海雑記」（昭和二十一年「文久二年上海日記」所収に、彼等の宿舎に聖書を呈せんといって訪ねて来た中国書生を、みんなで二回も追い帰へすことが書かれていることでも、国禁のキリスト教を、進んで求めるようなことは考えられない。当時の教会は、印刷所をもっていて、宣伝のためのキリスト教書籍を印刷出版するとともに、また宣教師の執筆する啓蒙的な、西洋学術知識の著述や、新聞雑誌類（宣教の文句もところどころに入れた）も出版していたのだから、高杉らは新しい知識（または情報）を求めようとして、頻りに教会堂にも出入りしたのだと考えねばなるまい。

（文学部教授　ますだ・わたる）

次号予定（23号—11月発行）

■ 講演記録

◇ 経済学批判と弁証法（下）

■ 書評

◇ 金史良作品集（Ⅱ）

◇ カミュ「幸福な死」

◇ ゴッドファーザー

■ わたしの研究ノートから

◇ 日中文化関係史の一面（Ⅴ）

◇ 人口論

◇ ヘーゲル詣で

その他

<お詫び>

22号に予定していた下記の三篇

・経済学批判と弁証法（下）

・三木清論

・カミュ「幸福な死」より

は都合により今回は休みました。

ここにお詫びいたします。

わたしの研究ノートから

ヘーゲル詣で

I

中埜　肇

一九七〇年八月下旬の一週間、東ベルリンのフンボルト大学で開かれるヘーゲル生誕二百年記念の国際学会で報告しないかと声をかけてくれたのは、国際ヘーゲル協会の会長ヴィルヘルム・バイアー教授だった。それを引受けたものの、実はその前の七月中旬に西ドイツのシュトゥットガルト（ヘーゲルの誕生地）でもうひとつの記念学会がある。両方に出席するとして、その間の約一ヶ月をどう過ごそうかと考えた。私にとって一〇年ぶりのドイツには再訪したい人や場所も多いが、それよりも縁あってヘーゲル哲学の研究に恐らく生涯を費すことになった私としては、自分ながらにこの年を記念するために、ヘーゲルの故地を訪れてその跡をとぶらうことにしようと決心した。そして、リヒアルト・ヴァーグナーの「ベートーヴェン詣で」（ただしこれは創作である）に倣って、これを私のPilgerfahrt zu Hegel とひそかに称した。といっても、許された時間は一ヶ月余り、その中で少くとも一週間はどこか静かなところで、ベルリンでの報告の仕上げをしなければならない。それに何よりも嚢中が甚だ心細い。しかしこのお遍路行は誰に頼まれたわけでもなく私ひとりがひそかに行うことだから、今の自分に可能な限りのことをすればよかろう。

とぶらうべきヘーゲルの故地は、彼がその六十余年の生涯のなかで一定期間居住していた場所とする。それを年代順に並べてみると、次のようになる。（カッコの中はそこにヘーゲルが居住した年代を示す。）シュトゥットガルト（一七七〇―八八）、テュービンゲン（一七八八―九三）、ベルン（一七九三―九六）、フランクフルト・アム・マイン（一七九七―一八〇〇）、イェーナ（一八〇一―一八〇七）、バンベルク（一八〇七―八）、ニュールンベルク（一八〇八―一六）、ハイデルベルク（一八一六―一八）、ベルリン（一八一八―三一）　もちろんこの年代は厳密に言うと少しずれるところもある。このなかで、イェーナは現在東ドイツにあり、またベルンは言うまでもなくスイスの首都だが、他はすべて西ドイツにある。して見ると、時間と費用と手続の関係から右の年代順に訪ねることはむつかしいし、二百年も後になってから年代順に訪ねてみてもたいして意味はあるまい。そこで私自身は次のようにすることにした。シュトゥットガルト――テュービンゲン――ベルン――ハイデルベルク――フランクフルト・アム・マイン――バンベルク――ニュールンベルク――イェーナ――ベルリン。そして各地では時間と費用の許すかぎりでヘーゲル遺蹟に触れようというわけである。以下に記すのはこの時の私の「ヘーゲル九番札所巡拝の記」である。

シュトゥットガルト

ヘーゲルは一七七〇年八月二七日にここで生れた。（この誕生日はゲーテと一日しか違わない。もちろん年は違うが、こんなこともあってヘーゲルはゲーテに対して深い親愛の念を抱いていた。）その因縁からであろう、先にもちょっと触れたように、一九七〇年の七月中旬にはここでもヘーゲルの生誕二百年を記念する国際学会が開かれた。このコングレスには有名なマルクーゼも来て講演をしたが、学会のことは別に記したこともあるし、私の遍路とは関係がないのでここには書かない。

さて、ヘーゲルの生れた家は第二次大戦の破壊にも辛うじて耐え、今も都心に

近いエーバーハルト街五三番地に残っている。（この家はフランクフルトのゲーテの生家などと違って、今も普通の民家である。）ここから僅か離れたある家に、当時シラーが軍医として下宿していたと、ものの本には書いてある。このヘーゲルの生家が私の巡礼第一番の札所になるわけだが、これは三階と屋根部屋から成るかなり大きなもので（彼の父は当時相当に地位の高い公務員だったから、これくらいの家に住むのは当然だったのだろう）、私がここを訪れた時はたまたま一階の改装工事中で内部へは入れなかったが、家の前面に向って右端に、カール・ドンドルフの手になるヘーゲルの円いブロンズ・レリーフが取り付けられ、その下の四角な銅板には In diesem Hause wurde am 27. August 1770 der Philosoph Geory Wilh. Friedrich Hegel gebaren と全部ギャビタルレターで彫んである。

ヘーゲルの父は哲学者が六才の時に、孟母三遷でもあるまいが、ギムナジウムの傍のもっと大きな家に移り住んだ。ヘーゲルはその後テュービンゲンの大学に入るまでこの家に住んでいたわけであるが、この家は戦争で破壊されて残っていない。ところで、ヘーゲルの通ったギムナジウムは一六八六年に建てられ、ギムナジウム・イリュストレと称されたが、

その後身は今ではエーバーハルト・ルートヴィヒ・ギムナジウムという名で別の場所に残っている。この学校もこの年の秋にフランクフルトのイリング・フェッチャー教授を招いて講演したり、ヘーゲルが終生愛好したソポクレスの悲劇「アンティゴネ」を生徒の手でギリシャ語で上演するなど、この哲学者のために記念行事をやるとのことだった。

道を尋ねながらこのギムナジウムを私が訪れたのは、コングレスの終った翌日、七月中旬とは言いながら、外套がほしいほど冷たい曇り日だった。別に面会の約束もとっておかなかったので、ギムナジウムの責任者たちは不在で会えなかったが、ちょうど授業が終って出て来た数名の生徒（日本流にいえば小学校の六年くらいであろうか）に、「君たちはこの学校で学んだことのある哲学者を知っているかい」と尋ねてみた。かれらは口々に「ヘーゲルでしょう。ぼくたちは彼を誇りにしているんです」と昂然と答えて走り去った。その明るい声を聞いて私の心も何とはなしにうれしかった。

シュトウットガルトの旧王宮に近いヴィルヘルムス・パレーにある市の資料館では、七月中旬から十月初めまで「ヘーゲル――生涯・業績・影響――」と題するヘーゲル関係資料展覧会が開かれていた。私は初めはコングレス参加者という資格でその開会式に出席し、二度目は前に述べたギムナジウムを訪れた帰りに今度はゆっくりとノートをとりながらこの展覧会を見た。この資料展はいやしくもヘーゲルの生涯とその時代に関心を持つ者なら必見のものと言ってよいほど充実したものであった。出品されたのは総数約五〇〇点、肖像やメダルもあれば、日記や手紙の類もあり、公式文書もあれば、当時の風景や建物を描いた銅版画もあるというぐあいで、ひとつとして私の興味をそそらないものはなかった。

その中のひとつだけを紹介すると、ヘーゲルは大学時代に「じいさん」というあだ名をもらっていたが、この当時のヘーゲルのサインブックが展示されていて、その中にファロットという友人が「神よじいさんを守りたまえ。A.万才!!」と書き、その右に二本の杖にすがって身体をかがめながらよろめき歩いている、禿げ頭で長いあごひげを生やした老人のスケッチを画いている。そしてこのA.というのは、当時テュービンゲンの学生たちのあこがれの的だった美少女アウグステを指している。見ていておのずと微笑の浮ぶのを禁じ得ない展示会であった。

テュービンゲン

ヘーゲルは一七八八年の秋にテュービ

ンゲンの大学に入った。この時彼はどの道を通ってシュトウットガルトからその少し南にあるテュービンゲンへ行ったのだろうか。そんなことはヘーゲルに関するどんな書物にも書いてない。もちろん一八世紀の終りに近い頃（フランス革命の前年）のことだから、駅馬車か郵便馬車にでも乗って、シュトウットガルトをめぐらしている小高い丘のひとつを越えて行ったのだろう。そんな牧歌的な想像をした私は、鉄道を避けて、シュトウットガルトの駅前から、その名もクラフト・ポストという、車体の横に昔の郵便馬車の馭者が吹いたラッパの紋章をつけたバスに乗って、テュービンゲンへ出かけた。実は十年前にも、このバスでテュービンゲンへ行ったものだった。

バスが石畳の坂道を丘の上へ登ると、シュトウットガルトの市街が一望のうちに見渡される。そしてその丘を越えるとシュヴァーベンの平野に入る。（ヘーゲルは死ぬまで「シュヴァーベンの子」であったと、コングレスの開会式で市長が強調していた。）なだらかに波打った畑、独特の造りの農家、深い針葉樹林、丈の高い雑木林、その間を流れる小川、そしてまた小さな教会を中心にかたまった村、古くてかしいだ家並、……それだけならばこの身は二〇世紀にあることを忘れもするだろうが、道路は舗装されているし、ところどころに殺風景なガソリンスタンドがある。一時間半でテュービンゲンに着く。

テュービンゲンは清らかなネッカール川のほとりにうずくまるように横たわっている昔ながらの静かな大学都市である。もっとも市街もだんだんと拡張され、大学も大部分の学部は新市街にあるわけだが、市の昔からの部分は自動車も通れないような石畳の坂道と小路ばかりで、その道に両側から覆いかぶさるように昔ながらの家並が連なっている。そしてヘーゲルが学んだ大学は、今も学部として当時の姿をそのままにとどめて、そんな家並を少しはずれたところに、ホーエンテュービンゲンという城の崖とネッカールの流れに挟まれるようにして佇んでいる。

一五四七年に建てられ、一七七七年に改築されたという古い校舎に入ると中庭があって、それをめぐって回廊がある。この大学はその前身がアウグスティン派の修道院であったから、その名残りをとどめているのかもしれない。古色蒼然として暗い階段を二階へあがると、中庭に面した廊下の壁に四枚のかなり大きなブロンズ・レリーフが懸けられている。それはこの大学を卒業した四人の世界的大学者の像である。つまり、天文学者のケプラーと詩人のヘルダーリンと哲学者のシェリングと、そしてヘーゲルである。

このなかで、ケプラーを除く三人は、よく知られているように、同級生であって、確かではないが寄宿舎で同室であったこともあるという。静かな曇り日の正午、このレリーフの前に佇立して往時を偲ぶ私の耳に、どこかの教室で鳴らすヴァイオリンの音がかすかに響いてくる。そしてこの三人が在学中に泊っていた寄宿舎も当時の姿のまま残っているのだが、あいにく改修工事中で、大きなキャンヴァスに覆われていた。その前の広からぬ庭に大きな樹立が二、三本、あくまでも静かなたたずまいである。

実はこのすぐ下の、ネッカールの岸に接した小さな塔のような家で、ヘーゲルと同年で同窓の親友であった上記の詩人ヘルダーリンがその悲劇的な生涯を長い精神的荒廃のうちに終えたのだが、そこへ行くには少し廻り道をしなければならない。そこでもう一度石段を昇って、古校舎の前からシュティフツキルヘという古い教会に入る。ここの内陣にはヴュルテンベルク公国歴代の君主が埋葬されている。名前の示すように、この教会と神学校（つまり昔のテュービンゲン大学）は一体のものだったわけである。ヨーロッパの古い教会には私のような異教徒の心をも引き裂く鋭い沈黙と深い敬虔とが満ちている。私はそこへ入るたびにいつも戦のかなければならない。学生であったヘーゲルももちろん日曜日にはここに来て礼拝に参加したであろうし、神学課程に入ってからは時折り、訓練を兼ねて、説教壇にも登ったはずである。（ヘーゲルの説教はあまり巧くなかったという。）

この教会の前の古本屋で、堀出物の箱の中から小さな「ヘーゲル」という本を見つけて買う。主人が「シュトウットガルトのヘーゲル・コングレスに参加されたのですね。ヘア・プロフェッサー。」と言う。ドイツで「ヘア・プロフェッサー！」とふつうの市民から挨拶されると実に良い気持になる。大学教授を尊敬する気風がまだこんなに強く残っているところはもう世界中にどこにもないのではなかろうか。

（つづく）

（文学部教授　なかの・はじめ）

NRの会　第30回共同広告

●ＮＲの会は、現代というカオスのなかで、出版活動を通して“人間の復権”を主張する新鋭出版社８社で構成されております。ただいま加盟出版社の売行良好書を ＮＲ「現代思想選書」として、全国有名書店300店にて展示販売中です。赤い帯に NR のマークが目印です。

●私どもの出版活動に対するご意見・ご批判をぜひお寄せ下さい。
宛先――ＮＲの会事務局＝東京都文京区本郷２－15－20　新泉社内

幻想画家論

瀧口修造著

ボッス、グリューネワルトからゴーギャン、ムンク、クレー、エルンストに到る絵画世界の地平を驚異的に切り拓いてきた多くの創造者たちの不可視の密室に光をあて、幻想の底に潜む夢と現実の劇的な弁証法を鮮やかに描き出した待望の名著である。**著者自装**　**好評発売中**　**¥1500**

フッサールと現代思想

E・フィンク他＝立松弘孝他訳／¥1200

フィンク、イポリット等によるフッサール現象学の問題性と可能性に対するアプローチと解明

シンボルとメタファー

M・フォス＝赤祖父哲二訳／¥1000

象徴のみに還元する理論化の傾向を批判し**隠喩過程**を中軸に感覚論と理性論の対立を止揚する

せりか書房
東京・文京・後楽2-20-15 TEL813・8566

白昼夢を撃て

松田政男著　（新刊）　¥1000

一見片々たる映画評の寄せあつめのように見える本書は全巻を熟読すれば、危機の時代の映画批評・創造の方法論が浮び上り、また鑑賞者・愛好者にとってはこよなく映画の観方考え方の指標となる。危機をはらみつつ退潮からの脱出口を求める映画の志向を論じる。

黒田寛一論

〈戦後主体性論への考察〉（新刊）

小林一喜著　¥900

前著「吉本隆明論」によって論壇にあらわれた著者が、次に批判の対象にえらんだのは黒田寛一であった。黒田が影響を受けたという梅本克己・梯明秀・武谷三男の思想にさかのぼって、主体性論を中心に、黒田の戦後思想界に果した役割と限界を論じたものである。

部落の歴史と解放理論

（第一四版）

井上　清著　¥750

著者は京都大学人文科学研究所日本史部会主任教授でもあり、かつて部落解放同盟の中央委員であり大会の運動方針案の起草委員の一人でもあった。本書はその実践のなかから生れたものであり、部落問題・差別問題に関する現代最高の達成であろう。好評14版発売。

田畑書店　東京都港区赤坂4-8-19

安藤英治・折原浩・田川建三・林道義他著

ウェーバーの思想と学問

¥1000

超克されねばならぬ近代とは何か？　社会諸科学全般に巨大な影響を与えたウェーバーが構築した近代知の世界を問題的に読みなおす営為を通して、密塞した今日の思想情況を切り裂き、真の批判的主体の在処を追究する！

本書の内容　ウェーバーの思想と学問／ウェーバーと「大学問題」／ウェーバーと諸マルクス主義／ウェーバーと現代／近代資本主義形成の精神的基盤／ウェーバーと労働問題／ウェーバーと経済学方法論・他

〈8月上旬刊〉

J・ゴルキン／大井孝・星野昭吉訳

トロツキーの暗殺

トロツキーの暗殺は、テロルの体制としてのスターリン体制がいかに革命とは無縁の存在であったかの証左である。本書はスペインの社会主義者ゴルキンがスターリニストによる連続五度の襲撃と迫害に耐え、事件の真相およびテロルの全構造を完全に解明した驚くべきドキュメントである！　¥1000

M・イーストマン／大輪盛登訳

若き日のトロツキー

レーニンがトロツキーによせた信頼と賞讃を本書に結晶！　革命の科学と詩人的直観の稀有な結合というべきトロツキーの原質を幼児性においてとらえ、反逆するすぐれた若い精神を喚起力ゆたかに描き出す！　¥700

N・ヴァレンチノフ／門倉正美訳　¥1500

知られざるレーニン

公的評伝の虚像からレーニンをとき放ち革命の時代を生きた多様な人間群の中にその実像を甦らせることによって“生きたレーニン”の思想と行動を気質・心性にまで遡り把えた比類なきレーニン論！

風媒社　名古屋市中区不二見7-1　振替・名古屋５６１６

「総有地」と「庶民」

二つのcommonsについて

わたしの研究ノートから

矢口孝次郎

（一）

イギリスの社会生活、さらには法律・政治などに関してコモンないしコモンズという言葉がしばしば用いられていることは周知のごとくである。例えば最もよく知られている言葉として、国民生活に関する基本的な法律が common law（普通法）と呼ばれ、上院に対する下院が House of Commons と呼ばれていることなどは例示する必要もないほど周知である。いな、「国家」そのものを指称する Commonwealth という言葉も、もともとは「人民の福祉」common weal という言葉から生まれ出たものなのである。その他、コモンという言葉が国民生活の諸相と結びついて用いられる場合は非常に多いのであるが、ここにコモンないしコモンズという言葉に関してイギリス的伝統を示す二つの言葉を選んで、若干の説明を試みたいと思う。

その一つはコモンという言葉が common land すなわちイギリス経済史上よく知られている「総有地」（あるいは「共有地」「入会地」などと訳されている）を意味する場合であり、他はコモンズという言葉が common people すなわち「庶民」を意味する場合である。この二つのコモンの用例は、その言葉の代表的用例であるのみならず、根本においてはイギリス社会の伝統を理解するについての共通の特色をもっているものと考えられる。

（二）

そこでまず、第一の場合のコモンについて考えてみたい。しかしそれに先んじて一つの興味ある事実に注目して頂きたい。すなわち、試みにロンドンの地図を拡げてみると、各所にコモンという名称をもった広いオープン・スペース（日本の公園ないし緑地にあたる）のあることに気付くであろう。例えば文学史でも知られているクラッパム・コモンとか、庭球選手権試合で有名なウィンブルドン・コモンとか、またはワンズワース・コモン、ハックニー・コモン等々、緑色に塗られた数多くの場所を見出すことができるのである。もっともそれらのオープン・スペースはすべてがコモンと呼ばれているわけではなく、例えば有名なハイド・パークやハムステッド・ヒース（往時の東京の戸山が原のようなハムステッドの原）などという名称をもったものもあるが、これらのものも、後述のように、等しくコモンの歴史の跡を示しているのである。それらの数多くのコモンは、ロンドンを中心とした周囲十五マイルの範

囲内だけでも七十余カ所に達するといわれるが、これがいわゆる「ロンドンの肺臓」lungs of London といわれる市民たちの健康にとってかけ替えのないリクリエーションの場所なのである。しかしこのような状況はひとりロンドンのみではなく、イングランド、ウェイルズの全体にわたってみられ、地方の都市や農村においても変りない。のみならずその広さは驚くばかりで、例えば中位のものと考えられる上述のハムステッド・ヒースをとってみても、その広さは約八〇〇エーカーもあり、最も広いロンドン北東のエッピングの森 Epping Forest に至っては、実に一九〇〇〇エーカーに達する広さである。

それならばどうしてこのように数多くの広大な土地が現状のように残存し、それがコモンと呼ばれているのであろうか。その歴史は古く封建時代にまで遡る。この点は経済学部の諸君には経済史の講義でおなじみであろうが、当時の農村すなわちマナア（荘園）には大別して三つの範疇の土地があった。第一は領主が直接に経営する「直営地」（あるいは「直轄地」とも訳され、日本の個（くだ）にあたる）であり、第二は隷農農民らが領主から借地して耕作する「隷農借地」であり、第三がいわゆるコモン、すなわち「総有地」であって、農民が共同で利用できる土地であった。すなわち、総有地は農民が慣習上の権利としてそこに家畜を放牧したり、そこから牧草や薪や木材を採ったり時にはそこで猟などもする土地でもあった。このようにコモンの存在は当時の農民の生活維持のための不可欠の条件であって、トーニーの指摘するように、「それが取り除かれたならば、村落機構がばらばらに崩れ去るようなくさびであった」のである。それならばこのような封建時代からのコモンが、何故に現代に遺るオープン・スペースとしてのコモンとなったのであろうか。そこに工業化・都市化の進展や、それに伴う領主＝地主の私利追求に対する社会の抵抗の歴史の跡が見出されるのである。

すなわち十八世紀後半以降になって、土地利用が営利主義的となるに従って、領主ないし地主たちは総有地に対する古い権利を主張して、種々の術策（その最も代表的なものがいわゆる囲い込み enclosure である）によって、農民から総有地を収奪し、それを自分らの占有に帰してしまったのである。その後十九世紀がすすむとそこに更に新しい問題が生み出された。それは産業革命以後における工業化や都市化の進展、特にそれと並行する都市人口の増大につれて、あたかもわが国の近年の状勢と等しく、時とともに都市が周辺の農村を侵蝕しはじめたことである。その結果、領主の後裔たる地主や彼らから土地を購入した商人たちは当然にコモンの商品化すなわちその分割売却を企図したのであった。しかし、これに対しては、強力な社会的抵抗がこれまた当然に起った。それは拡大し、人口稠密化する大都市の市民の憩いの場所としてコモンを残存維持すべきであるという主張であって、はじめは若干の識者の主張であったが、時とともに市民たち、すなわち庶民の強力な支持をうけた大きな運動として展開されるに至った。その運動の推進母体となったものが「コモンズ保存協会」Commons Preservation Societyであって、その有力なメンバーの一人にJ・S・ミルの名が見出されるのも興味深い。それらの運動の結果として、地主らの貪欲から救い出された最初のケースが、留学する日本人にもなじみ深い前述のハムステッド・ヒースであるが、その後全国各地に大小のコモンズが次々と解放され、特にロンドンの場合には、スモッグに悩まされている市民たちのいわゆる「肺臓」が生み出されたわけである。

以上のように、コモンズはその起源は古く封建農村の総有地に発するのであるが、それを現存するコモンズ、すなわち庶民のために開放されたオープン・スペースに再生せしめるについては、運動の表面に立った識者の指導や努力もさることながら、その背後においてこれを支持した庶民の力のあったことを忘れてはならない。この意味においてもそれはまさにコモンズである。

（三）

さて、コモンズという言葉の更に重要な他の一つの意味は、それが common people を指すということである。コモン・ピープルはわが国でいう「庶民」とか「常民」とかいわれるものに当るがそれはイギリスの歴史の上ではどのように考えられるであろうか。

わが国における庶民という言葉は、辞典などによれば「もろもろの民」のことであり、また「貴族などに対するなみの人」のことである。あるいは「名もなき民」のことであり、また激石の『草枕』の冒頭にあるような「向ふ三軒両隣りにちらちらする唯の人」のことである。その点ではイギリスのコモン・ピープルも変りない。しかし、コモン・ピープルの歴史を辿る時、重要なのはただそれだけのことではないのである。

さてコモン・ピープルという言葉はすでに古くから用いられ、十四世紀のチョ

ーサーやウィクリッフなどによっても用いられたといわれるが、いまここにはそこまで遡って語源を詮索する必要はない。それが社会の一般用語としてかなり広く通用するようになったのは、十七世紀以降のことであった。当時この言葉は「地位や敬称や位階のない大衆」general body of commons, without rank, title and dignity を意味していたのであって、もっと明白にいえば貴族・僧侶・騎士・ジェントリーその他の特権階級に対して、社会の底辺を構成する人々を意味したのである。いわば段階的世界 Stufen Kosmos といわれた封建社会の伝統において、最低の段階におかれた人々であって、時には bottom dog というようにさえ表現されていた。

ところでこの時代の社会構成について注目すべきことは、上述したような特権階級には共通した二つの特質のあったことである。その一つは、彼らの地位ないし身分が世襲的であったことであり、他はそれが基本的には土地の所有すなわち「所領」estate の所有と結びついていたことであるが、これらの何れもコモン・ピープルにとっては全く無関係のことであった。

もっとも、このように考えられるにしても、当時の現実の階級構造がこのような二つの階級だけから構成されていたというのではなく、現実には両者の間の中間の人々、当時の言葉で middling people, middling sorts などといわれる階層が存在していたことは事実である。例えば著名な一六八八年のキングの推定についてみても、上層として一括される階層と、いわゆるコモン・ピープルといわれる労働者・小屋住農・貧民等との中間に、小自由土地保有農・借地農・小売店主・旅館主・水夫・船員等の階層が介在していた。しかし何れかといえば、これらの階層の人々はコモン・ピープルに近く、或るものはむしろそれに近似していたと考えて差支えない。

さて、コモン・ピープルは一応このように考えられるにしても、更に重要な一つの特質をつけ加えなければならない。それは、例えばデフォによって「自分の腕を頼りにする単なる労働者たち」mere labouring people と称されたように、同時に「労働」と結びつけられていたということである。このようにして彼らは「貧困」であるとともに「労働」する階級、いな貧困であるが故に労働せざるをえない階級であって、後年の「労働貧民」labouring poor がすでにこの時代に現実化されていたのである。のみならず、働く者は貧しいという止まらず、働く者は貧しくなければならないというような労働観さえ生み出されていた。しかし、このような意味のコモン・ピープルは、実は産業革命以後に至って確然たる姿をもって出現してくるのである。

それについては、コモン・ピープルに対立する階級の変化に着目しなければならないが、それが新たなる中間階級の出現である。上述のように十七・八世紀の社会にも言葉通りの「中間」階級のあったことは事実である。しかし産業革命の終了、「世界の工場」への進展とともに出現してくる中間階級はもはや単に「中間」にある階級に止まるのではなく、その経済上の力――いうまでもなく新しい生産手段＝資本の所有――を基盤として国家社会の中心的勢力としてのし上がってきた中産階級 middle class すなわちブルジョワジーであった。こうして労働する階級としてのコモン・ピープルに対立するものはもはや旧い時代の上層階級ではなくなり、またコモン・ピープルも単に「地位や敬称や位階のない大衆」だけには止まらなくなったのである。端的にいえば、プロレタリアートという新しい階級を構成することとなったわけである。このことはすでに十九世紀の前半においてフランス革命の影響が彼らの間に浸透しつつある頃に述べられた支配者階級の恐怖の言葉の中にも示されている。それはいわゆる労働全取権思想がこれらの階級の間に拡がりつつあることを憂いて述べられたものであるが、「文明社会を崩壊せしめようとする危険な理論がコモン・ピープルの間に拡がりつつある」と警告しているものである。この場合の「コモン・ピープルとは外ならぬ無産労働者階級を指している。少なくともそれを中心とする民衆を指しているのである。

さて産業革命を経過した後のこのようなコモン・ピープルの社会的存在としての変化は、広くみれば技術革新＝産業構造の変化に対応する社会階級の構成の改編ということができる。従ってこの観点からみる時は、その改編は更に進んで考えられねばならないことはもちろんである。特に近年における進展は急激であって、労働者階級のホワイトカラー化や新中間階級の出現が論議されている。またそれは社会的地位や職業の世襲の消滅、階級間の境界の不明化その他の現象と結びついている。従って現代におけるコモン・ピープルの意味については、このような新たなる見地からの解釈が必要となるであろう。しかし基本的にはそれは依然として労働者階級によって構成されており、それが中心をなしている点は今もって変りないといわねばならない。

（経済学部教授　やぐち・こうじろう）

〈資料〉

投稿

田中角栄『日本列島改造論』

小谷節男

まえがき

本書は、自民党総裁公選を前にして出版されたものである。

『日本列島改造論』の具体化については、田中角栄が首相に就任以来、テレビ、新聞、雑誌などを通じて種々の角度から取り上げられ、各界の論評や批判も様々な形で出されてきている。そこで本稿では私見をまじえず、本書の主要な内容を忠実に要約紹介して、日本列島改造の構想を全体として明らかにすることを目標としたい。

本書の目次は、Ⅰ、私はこう考える。Ⅱ、明治百年は国土維新。Ⅲ、平和と福祉を実現する成長経済。Ⅳ、人と経済の流れを変える。Ⅴ、都市改造と地域開発。Ⅵ、禁止と誘導と。Ⅶ、むすび。からなっている。以下、順を追って述べようとおもう。

Ⅰ「都市政策大綱」について

昭和四十三年、田中角栄は自民党都市政策調査会長として『都市政策大綱』をまとめたが、それが『日本列島改造論』の基礎となっているものである。『都市政策大綱』の基本問題は財政制度、地方自治、農地制度の三点からなる。

まず財政制度について。明治以来百年間、日本財政は財政支出中心主義をとってきた。しかし国土改造計画においては、財政資金の先行的重点的な投入と同時に、税制の政策的調整、禁止税制と誘導税制を有効に活用して、税制機能の積極的な運用をはかろうとする。また民間資金を動員するために利子補給制度をとる。そして社会資本の蓄積のために、財政の単年度均衡をつけて、長期計画に基き積極的な公債政策をとる。

つぎに地方自治について。国土計画は地方ブロック、府県、市町村などの諸段階における地域計画と一体である。将来日本列島を一日交通圏、一日経済圏として再編成するためには、行政の広域化を促進することが重要となる。

さらに農地制度について。高能率、高収益の農業を確立するためには、農家が

単なる土地保有者となり、個々の零細な土地を結集することが必要となる。農家一単位の農業経営規模が、自家保有地一ヘクタールと他人保有地十～二十ヘクタールをこなす程度まで拡大するには、協業、請負、賃耕などの方法をとることである。全国的な土地利用計画の樹立、永久農地の策定、現行農地法の廃止など農地政策の根本的な改革が必要となる。

「都市政策大綱」の眼目は、過密と過疎の同時解消であるが、この思想から次ぎの具体的政策が生まれる。第一は本州四国連絡橋公団の新設（昭四五年）、第二は「全国新幹線鉄道整備法」の成立（昭四五年）、第三は「自動車重量税法」の発足（昭四七年）、第四は「工業再配置促進法」のスタート（昭四七年）などである。とりわけ、工業再配置が日本列島改造の主導力であるが、そのねらいは現在太平洋ベルト地帯に集中している工業生産を、全国各地域の開発能力に応じて適正に配置することにある。

Ⅱ　都市集中のデメリットの国土維新

工業化の進展は国民総生産と国民所得を増大せしめた。日本列島改造の基本的視点は、つぎの諸原則から出発する。

(1)国民総生産と国民所得の増大は、一次産業人口比率の低下と、第二三次産業人口比率の増大および都市化に比例する。

(2)人間の一日の行動半径の拡大に比例して国民総生産と国民所得は増大する。

(3)地球上の人類の総生産の拡大や所得の拡大は、自らの一日の行動半径に比例する。

さて戦後日本経済は、復興経済―高度成長経済―国際経済の三段階を経て発展してきた。換言すれば、それは量的拡大の時代―質の時代―国際的質の時代への移行であり、また食の時代―衣の時代―住の時代への変貌でもある。そして戦後の高度成長過程を通じて、産業や人口の都市集中が進み、過密と過疎の弊害が激化した。それは例えば、「人口の三一%が国土の一%に住む」「許容量を越える東京の大気汚染」「一寸先はやみ、停電のピンチ」「時速九キロの〝くるま社会〟」「一人一平方メートルの公園面積」「五時間で焼けつくす東京の下町」「生活を脅かす大都市の地価、物価」「一人あたり四畳半の住宅」「不足する労働力」「過疎と出かせぎでくずれる地域社会」など枚挙にいとまがない。

かくて明治百年は丁度、都市集中のメリットとデメリットが交差したフシ目であった。「都市と農村、表日本と裏日本の発展のアンバランスは、いまや頂点に達しつつある。こうした現状を思い切って改めなければならない。」「明治百年は国土維新」である。

Ⅲ　成長活用型の経済運営

戦後の日本経済は平均して実質十%以上の高度成長を続けてきた。ところがここ数年来、民間設備投資の停滞、輸出拡大に対する諸外国の警戒心、大都市の過密と環境汚染の深刻化、若年労働力の不足など内外情勢は急速に変化した。しかし経済成長を支える要因はまだ十分に存在している。すなわち、社会資本投資の拡大、個人消費支出の拡大、省力化・公害防止・安全確保などの部門での活発な投資、平和と国際協調を促進する積極的な経済運営などがそれである。つまり、民間設備投資主導型＝輸出第一主義の経済運営を改めて、公共部門主導による福祉重点型の政策をとるならば、まだ高度成長を持続することが可能である。

昭和六十年度の国民総生産は、仮りに年間成長率十%とすれば、三百四兆円＝一兆ドルとなる。この場合、製造業の生産額は二百七十三兆円と四倍以上になる。工業用地必要量、工業用水補給量は二倍以上に、また貨物輸送量は四倍に増大する。国民所得も就業者一人あたり年間三百万円をかなり上回る。問題は日本列島にいまのアメリカなみの経済をどうして上乗せするかである。将来の産業構造としては、資源、エネルギーを過大に消費する重化学工業から、人間の知識を多く使う知識集約型産業へと重心を移動させることである。そのためには研究開発集約型産業、高度組立産業、ファッション産業、知識情報産業などを発展させて、知識集約型産業に経済全体を引張る役割をバトンタッチすることである。また今後の日本経済は、設備投資中心の「成長追求型」から、経済成長の成果を国民の福祉や国家間の協調に活用するという「成長活用型」の運営に切換えるべきである。政府の財政政策は根本的に転換して長期積極財政により、社会資本の充実を促進することにより、経済の高度成長を促すことである。かくて「成長活用型」の経済運営は「福祉が成長を生み、成長が福祉を約束する」ことになるのだ。

Ⅳ　工業再配置で描く新産業地図

工業再配置は国土総合開発体系の中核的な政策である。それによって太平洋ベルト地帯の工業出荷額は、昭和六十年度までに現在の七三%から五三%へと引下げられる。具体的には、工業を首都圏や近畿圏など移転促進地域から、日本列島全域の誘導地域へと移転することである。工業再配置においては、工業の型はつぎの二つに分類される。

[A] 基幹資源型産業

鉄鋼、非鉄金属、石油精製、石油化学、電力など基幹資源型産業は、日本列島の北東地域（苫小牧、むつ小川原、秋田湾など）と西南地域（周防灘、志布志湾など）に配置して大規模な工業基地を建設する。昭和六十年度三百兆円経済における基幹産業の需要は、粗鋼約二億トン、石油精製千五百万バーレル、石油化学エチレン換算千七百万トンに達する。それぞれ現在の生産量に比べると、粗鋼二倍以上、石油精製四倍、石油化学四倍になる。ところで、各業界が現有地で最終的に生産できる規模は、鉄鋼一億六千万トン、石油精製八百万バーレル、石油化学エチレン五百五十万トンであるから、昭和六十年度の需要を充足するためには、一部を輸入でまかなうとしても、粗鋼四千万トン、石油精製五百万バーレル、石油化学エチレン九百五十万トンの生産は現有地以外に求めざるをえない。これは大型製鉄所二カ所、大型精油所五カ所、大型エチレンセンター五カ所の新規立地を必要とする。それらの立地では、鉄鋼－化学－電力、石油－石油化学－電力という複合コンビナートを形成するから、また公害調整、環境保全、災害防止などを含めて、用地規模はいっそう広大となる。このような大規模工業基地の建設には、港湾や用水が確保でき、地価の比較的安いところとして北東地域と西南地域しか残されていない。

[B] 内陸型工業立地

つぎは、内陸型工業の農村地域への展開である。機械工業、エレクトロニクス、医療機器、住宅機器などシステム産業の多くは内陸型工業である。これは、臨海型装置工業に比べると、労働集約的であり田水量も少なく付加価値生産性が高く、輸送も鉄道や自動車ですみ、大規模な港湾がいらない。そのうえ内陸型工業は、知識集約的であり産業構造高度化の過程で高成長の可能性を持っているから、国土開発に果す役割も大きいのである。昭和六十年度の工業出荷額の比重では、基幹資源型臨海工業は二十%程度に低下し、内陸工業は八十%程度に増大するという推計がある。内陸型工業の立地条件は道路、鉄道などの輸送力、住宅・商店・遊び場・学校・病院などの都市機能、および労働力の三つであり、全国に分散配置することができる。農村工業化は、過度的には一村一工場方式をとってもよいが、長期的には拠点開発方式を中心としたい。内陸型工業では、自動車輸送の割合が大きく、道路の果す役割が決定的となる。具体的には、高速自動車道のインターチェンジ周辺に人口二十五万人程度の地方都市を整備して、その一角に内陸型工業団地を建設するのが適当である。内陸型工業団地は、標準タイプで二百～三百ヘクタール程度の規模をメドとして、本格的なインダストリアル・パークにしていきたい。内陸型地方都市の育成では既存の都市機能の集積と高速自動車道の建設計画からみて、例えば津山、新見、横手、酒田・鶴岡、三条・長岡、武生、福知山、都城などをあげることができる。

[C] 日本産業の流れ

さて全体としての日本経済の流れは、基幹資源型産業を日本列島の北東、西南臨海地域に、高付加価値産業を内陸農村地域に配置すると、「工業再配置ができたあとでは遠隔地の大規模臨海工業基地で素材を生産し、内陸で加工し、全国の消費地に配分するという形になる。それとともに全国新幹線、高速自動車道の働きは地方の人間を大都市に吸いあげる求心力から大都市の人間を地方に運ぶ遠心力へと転換する」と。

なお、寒冷地や豪雪地帯は、ある意味では工業化に適している。シベリヤ開発が軌道に乗ってくれば裏日本や北海道の

工業再配置と地域別工業出荷額　（単位：10億円，%）

地域	45年実績見込み (A)	シェア	60年 従来の立地性向を延長した場合（暫定試算）	シェア	工業再配置目標（暫定試算）(B)	シェア	倍率 (B／A)
北海道	1,512	2.2%	3,450	1.3%	15,850	5.8%	10.48倍
東北	3,174	4.6	8,670	3.2	36,350	13.3	11.45
関東	25,155	36.4	120,030	43.9	68,060	24.9	2.71
東海	11,488	16.6	38,370	14.0	37,440	13.7	3.26
北陸	1,665	2.4	5,000	1.8	10,670	3.9	6.41
近畿	15,719	22.8	65,410	23.9	39,630	14.5	2.52
中国	5,100	7.4	15,850	5.8	22,410	8.2	4.39
四国	1,772	2.6	6,450	2.4	11,750	4.3	6.63
九州	3,475	5.0	10,090	3.7	31,160	11.4	8.97
全国	69,060	100.0	273,320	100.0	273,320	100.0	

工業立地はいっそう有利になる。「改めて日本海時代、北海道時代の到来を予言しておきたい」と。

V 交通ネットワークの形成

総合的な交通体系の立案では、時間距離の短縮や、大量輸送能力とコストの問題が重要である。

(1)時間距離の短縮の問題。産業や人口の地方分散では、人間の心理的な距離感や情報伝達の落差が障害となる。地域間の時間距離の短縮は交通網や情報網を先行的に整備すること、例えば全国新幹線鉄道網の建設、高速自動車道路網の建設、本州四国連絡架橋、航空網の整備などによって達成される。その目標は、日本列島を一日行動圏にすること、主要都市相互間の所要時間を一時間圏に組入れること、全国各地区を一県以内の距離感に圧縮すること、などである。

(2)大量輸送能力とコストの問題。「仮りに六十年度の三百兆円時代を前提とすれば、全国新幹線鉄道九千キロメートル以上、高速自動車道一万キロメートル、石油パイプライン七千五百キロメートルを建設するとともに、内海航路の整備、在来鉄道の複線電化、近距離通勤網の拡充をしなければ、増大する輸送需要に追いつけない。」例えば六十年度の貨物輸送量は、一兆三千二百億トンキロであり、四十四年度の四、二倍に達する。もし内航海運が全輸送量の五十%を分担するとすれば、陸上輸送は六千六百億トンキロを処理しなければならない。しかしトラックの輸送量は道路事情や運転者確保の点から、千四百六十億トンキロが限度である。だから、鉄道、海運、航空などの輸送力を拡大して、近距離は自動車、中距離は鉄道、遠距離は内航海運で担当すること。またパイプラインを石油輸送の主力とし、全国新幹線にも貨物輸送の機能を与えること、などが必要である。

1, 全国新幹線道路網の建設

新幹線の建設では、現在の東海道新幹線、山陽新幹線のほか、東北新幹線、上越新幹線、成田新幹線など三線の建設決定をみ、また北陸新幹線、九州新幹線、東北・北海道新幹線など三線も基本計画に組入れられた。さらに地域開発の点から、奥羽北陸新幹線、中国四国新幹線、九州四国新幹線、山陰新幹線、北海道縦貫新幹線、北海道横断新幹線などが予定されている。なお、昭和五十五年頃には第二東海道新幹線が必要となるが、これはリニアモーター方式による超高速新幹線として建設したい。

2, 高速自動車道路網の建設

高速道路が工業の地方分散に果す役割はきわめて大きい。高速自道車道の建設は十年以内にも総延長一万キロメートルに拡大すべきである。現在高速道路の総延長は七百九キロメートルにすぎず、先進工業国の中でも一番貧弱である。とくに日本列島を輪切りにする横断道路の建設は、表日本と裏日本を結び、両者の格差解消と内陸部の農山村地域の開発に決定的な役割を演じる。だから「日本横断道路」の建設に集中的に力を入れ、先行的な投資を強力にすすめたい。昭和六十年までに一万キロの高速道路が必要だというのは、こうした理由からである。

3, 本州四国連絡橋

本州と四国を結ぶ連絡橋は昭和六十年度までに明石―鳴門、児島―坂出、および尾道―今治の三橋とも完成させる。本四連絡三橋は新幹線鉄道や高速道路とつなぎ、近畿、中国四国および九州を一体化して広域経済圏に育てあげる。連絡橋は海上数十メートルの高さで南北通行を引受け、瀬戸内海航路の安全性を高める立体交差ともいえよう。

(1) 明石―鳴門ルート

これは、近畿と四国の時間距離や経済距離を短縮し、大阪湾から紀伊水道にかけての総合開発を先導する。① 石油基地としての橋湾。橋湾は五十万トン、百万トンのタンカーが入れる水深を持つ。京阪神工業地帯で使う石油は橋湾に陸揚げして、パイプラインで明石―鳴門の連絡橋に抱き合わせて運ぶのである。② 吉野川総合開発計画。吉野川は西日本随一の豊かな水量を誇る。四国の水需要を充足して余裕があれば、明石―鳴門連絡橋に水道パイプをのせて、淡路島から阪神へ分水を考えてもよい。③ 鉄道橋の併設。これは、徳島から佐田岬を通り海底トンネルで大分へぬける四国九州新幹線と山陽・東海道新幹線を結ぶ。また四国縦貫自動車道と山陽自動車道、名神・東名高速道路をつなぐことにもなる。

(2) 児島―坂出ルート

この連絡橋には松江、岡山、坂出、高知を結ぶ中国四国新幹線鉄道を通したい。① 経済圏の結合。この地域は中国山脈、瀬戸内海、四国山脈に分断されて四つの異質な経済圏を形成してきたが、児島―坂出ルートに中国四国横断自動車道と新幹線鉄道を通すことによって、バラバラの経済が有機的に結合される。② 工業地帯の結合。この橋は岡山、倉敷、水島、玉島など岡山県側の工業地帯と高松から

坂出、川之江、伊予三島、新居浜にいたる工業地帯を一つに結ぶ役割を果す。⑤石油パイプライン。橘湾から明石ー鳴門ルートに乗せる石油パイプラインの分岐線を瀬戸内海沿いに延長して、児島ー坂出連絡橋に抱き合わせて岡山県側に石油を輸送することも考えるべきである。

(3) 尾道ー今治ルート

これは他の二橋と違って鉄道を併設しない道路橋である。①石油基地宿毛湾。宿毛湾は陸奥、橘、志布志とともに五十万トン以上の大型タンカーが入港できる天然の良港である。これを活用して石油の受入れ港湾と中規模工業基地をつくる。②長浜臨海工業地帯。長浜港は工業湾港として、肱川の開発から生活用水、工業用水も確保できるので、臨海工業地帯を開発する。③石油と水のパイプライン。宿毛湾、長浜港から石油パイプラインを敷き、尾道ー今治連絡橋にのせて広島県、山口県へ石油を輸送する。また水のパイプラインを敷けば、大島、大三島など瀬戸内海の離島に水を供給できる。

以上、本四連絡三橋は近畿、中国、四国、九州の経済圏を有機的に結合し、広域的な発展を可能にする。かくて「四国は日本の表玄関になりうる」。

4, 大型船時代の工業港

天然資源に乏しい日本は、主要原燃料の大部分を海外に依存するため、重化学工業地帯を港湾建設のできるところにつくった。ところが、東京湾や大阪湾沿岸地帯の海上交通は過密化の一途をたどっている。これからは、地方に大規模な工業港湾を先行的に建設して、石油、鉄鉱石、非鉄金属、鉱石、石炭、木材、天然ガスなど大量の原燃料を受入れなければならない。超大型タンカー時代の訪れとともに鉱石運搬船、LNG運搬船も次第に専用化、大型化しつつある。例えば原油輸送では五十万トン級タンカーの導入は避けられない。この種の大型船が入港できる湾は、全国に四ヵ所、つまり、鹿児島県の志布志湾、高知県の宿毛湾、徳島県の橘湾、青森県のむつ湾しかない。現在予定されている苫小牧東部、むつ小川原、秋田湾、周防灘、志布志湾などの大規模工業基地の建設は、工業港湾の建設を同時に必要とする。

5, 石油パイプライン

石油輸送については石油中継基地からの中距離輸送はパイプラインを主体とする。石油の輸送コストをみると、輸送距離百キロメートルにつき内航タンカーを一とすれば、パイプライン二、鉄道タンク車四、タンクローリー車二十の割合となる。また、輸送能力の点でもパイプラインは、タンクローリー車とは比較にならないほど大きい。一日一万トンの輸送に要する人員はパイプライン六人に対してタンクローリー車千三百人である。さらに安全性の点でも、石油パイプラインの死亡事故発生率はタンクローリー車の千四百分の一だという。現在、石油パイプラインの総延長はコンビナートの自家用設備を中心に約千キロメートルにすぎない。昭和六十年までには、総延長七千五百キロメートルを建設して、国内石油輸送量の少くとも四十%をパイプラインにゆだねたい。

6, 空港の整備

ここでは将来の空港整備の考え方として、工業の再配置と関連して、臨空港工業地帯の建設についてのべよう。

第一は、国際貨物空港の建設である。「産業構造の知識集約化がすすむにつれて、すこしくらい割高な運賃を払っても採算の合うようなコンパクトで付加価値の高い製品がふえるのは確実である。国際市場の激しい変化に対応して、国際競争に耐えていくためには、情報収集とともに、部品や製品の改良の早さと輸送のスピードが決め手になってくる」。この種の知識集約型の工業立地は、高度な技術者を必要とするだけに都市集積とは切離せない。だから、国際貨物空港と臨空港工業地帯の候補地は太平洋ベルト地帯、とくに伊勢湾か駿河湾を考えられるが、土地の入手しやすい東北や南九州であってもよい。

第二は、地方空港の整備である。空港面積が比較的すくなくてすむ短距離着陸機（STOL）を開発し、地方都市と巨大都市、地方都市相互間を結ぶのが合理的である。地方空港と関連した臨空港工業立地を考えたい。

Ⅵ 都市改造と地域開発

東京、大阪などの大都市は、国際的な活動と情報の結節点であり、中枢管理機能の集積地として機能の整理と純化をはかる。工場、大学、研究機関などは地方に分散して、地方都市の機能を充実し自己完結性を高める。地方都市の整備は次ぎの三点に集約できる。第一は、札幌、仙台、広島、福岡など地方ブロックの中核都市および県庁所在都市の中枢管理機能を充実すること。第二は地方生活圏の中心都市、例えば北海道の旭川や釧路、青森県の八戸、弘前など地方中都市の機能を高めること。第三は工業再配置によ

る工場団地を中核とする「新二十五万都市」を建設すること、などである。

1, 情報列島の再編成

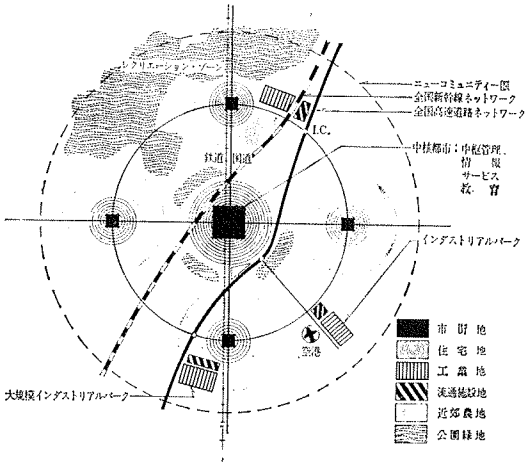
大都市と地方の格差を解消するには、全国各地域を結ぶ情報ネットワークを先行的に整備することが必要である。第一に有線テレビ、テレビ電話、データ通信など情報ネットワークを作ること。第二に新しい情報手段の利用技術と情報システムを積極的に開発し、各地域の情報活動に必要な機能を積みあげること。第三に通信コストの合理化をはかること、などである。例えば、現在の電話料金体系は地方への通信が非常に高いので、一足飛びに全国単一にするのは無理だとしても、長距離通信の料金をどしどし安くしてゆけば、経済的にも地方と中央との情報格差が縮少するはずである。要するに情報ネットワークの整備、利用技術や情報システムの積極的開発、通信コストの合理化を三本柱にして日本全国を「情報列島」に再編成する。新しい情報ネットワークとシステムは、産業や人口の地方分散を容易にする。「情報化時代の主役はコンピューターによる情報処理である」。

2, 新二十五万都市

新二十五万都市の建設は、地域開発の核として、大都市改造と並んで日本列島改造の中軸である。それは二つの方法をとる。第一は、地方の小都市を充実強化する方法である。例えば、人口七～十万人の小都市の市街地を外に拡大し、市街地から離れて工場団地を建設し、市街地と有機的な連繋を持つブロックを形成して、人口の吸収をはかることである。第二は人口二万人程度の隣接町村が多数集合して新しい市街地をつくり、周辺に工場団地を立地する方法である。この場合は広い用地が確保でき、高速自動車道のインターチェンジに近く、新幹線網の停車駅との交通も確保できる地域が理想的である。

新二十五万都市においては、広域的な都市計画、土地利用計画をつくり、住宅地区・工業地区・商業地区などを定め、道路、上下水道施設、公園、緑地などを先行的に整備する。新二十五万都市は、つぎの諸機能を持つべきである。① 地域開発の拠点としての機能。情報、流通、医療、教育、文化、娯楽などの施設を整備する。② 日常の経済活動を展開できる機能。自ら発展しうるだけの産業経済活動、例えば工業団地、銀行、デパートなどをもつ。③ 地域文化向上の役割を果す機能。住宅、道路、上下水道などの都市施設と、劇場、美術館などの文化施設をつくる。④ 地元住民が新しい人間関係をつくるニューコミュニティーの新しい地域社会であること。広場や公園、文化活動やスポーツの施設をつくり、都市内の情報を伝達する有線テレビ網を設置する。

ニューコミュニティーのモデル



新二十五万都市の一つの形態としては、インダストリー・キャピトル（特定産業首都）、つまり「その産業では日本一の集まり」である産業都市をつくることも考えたい。

3, 農工一体化と近代農村

農村は国民の食糧供給基地である。主要な食糧は八十%程度の自給率を保つ必要がある。食糧を輸入に頼る場合、第一に輸出国が凶作のとき安定した供給が保証されない。第二に農業生産は一度縮少すると回復に相当の困難と長い時間を要する。今日、農業は歴史的な転換期に直面している。農

業人口の減少に対応しながら生産性を高め、二、三次産業なみに農業所得を引き上げるためには、少数精鋭による経営の大規模化と機械化の本格的な導入によって、資本集約的な農業をすすめる以外にはないのである。その場合、第一に農業から流出する労働力は工業再配置により地元の工業団地で吸収する。「農工一体化は農業の生産性を高め、その近代化を誘導するテコとなる」。第二に農業経営自体は食生活の高度化多様化に対応して畜産、果樹、野菜などの部門に重点をおく。「水稲中心の農業から畜産を中心にした農業への転換は、避けられない」。

大規模な資本集約的農業経営は分散した零細な土地所有や高い地価からみて、協業、請負、賃耕、賃借などの形態をとらざるを得ない。それには、まず全国と各地域における総合的な土地利用計画を確立して、現在の農地から道路、空地、工業用地などに転換する面積を決め、転用地を差引いた農地を「永久農地」に確定し、財政援助によって集中的な土地基盤整備を行なうことである。「高能率、高性能の日本農業の誕生は土地基盤整備の成否にかかっている」。土地基盤整備では、一区画は大型農機を使いやすくするため一～三ヘクタールとし、かんがいはパイプあるいはスプリンクラー方式をとり、かんがい時間や水量はコンピューターで制御し、排水は水位を地下一メートル以下に下げ合理的な輪作をやりやすくする、などである。高生産性の農業を実現すれば、食糧品のコストは大幅に低下し、農業の国際競争力は強化する。

農村集落の再編成では、「都市計画」に対応する「農山漁村計画」を樹立して新しい町村づくりをすすめる。

4, 立体都市の構想

都市改造では、第一に都市の立体化、つまり都市内の主要地域を高層化によって再開発すること。第二に近郊開発、つまり近郊地域を先行的に開発して都市の無秩序な膨脹を食い止めること、である。

都市の立体化では、まず都市全域の都市計画と土地利用計画をたてる。土地利用計画では各地区の用途を明確にして容積率、道路率、空地率などを決める。大都市では低層建築を制限し高層化の容積率を設定する。そして十年とか十五年とか一定の期限を切って、指定地域の区画整理をすすめ高層建築に建て替えてもらうわけである。「この低層建築制限というのが政策発想の転換なのである。」例えば、指定地域内では二十メートル（七階）以下の建物を制限して高さをあげれば、その分だけ空地ができて公用地が生みだせることになる。

近郊開発では、無秩序な住宅の拡大、スプロール現象に対応して、高層共同住宅を中心とする新住宅地の開発を計画的にすすめることである。それには一定基準の基盤整備を建築許可の条件として、違反建築に対して電気、ガス、水道、電話などの新規敷設を禁止する。

都市の過密現象を断つには、地方に産業や人口が定着し地域経済が自転する仕組みが必要である。その意味で「都市改造と地方開発とは同義語である。」工業再配置計画では、昭和六十年までに首都圏既成市街地や近畿圏既成都市区域にある二万ヘクタールの工業用地を半分程度に減らす予定である。都市の立体化は、高層化によって生じる空間を公共の福祉のために活用するところに最大の目的がある。

Ⅶ 禁止と誘導

1, 自動車重量税

新しい国づくりでは、財政資金の先行的重点的投入を行なうと同時に、税制の政策的な調整機能つまり禁止税制と誘導税制を積極的に活用する。

自動車重量税は、自動車の保有者に対して車検と庫出しのとき課税するもので、それによって得られる財源を道路と鉄道の建設資金にあてる目的税である。例えば、日本では六トン車に対する税は年間十数万円であるが、西ドイツでは百六十万円以上の税金を課している。これは明らかに禁止税制であると同時に、「重量物はオート・バーンを使うよりも鉄道や船舶を使ってくれ」という誘導税制でもある。道路と鉄道と港湾は総合的一体的にとらえなければならない。日本列島を一日交通圏、一日経済圏に再編成するための前提は総合交通体系の確立である。全国新幹線鉄道網、高速自動車道路網、本四連絡架橋などを実現するための新しい布石が自動車重量税である。

2, 産業政策の大転換

新しい国づくりの中核は工業の再配置である。これを推進するためには、税制による政策的な調整機能を主軸にすえなければならない。すなわち、一方では過密地域や公害多発地帯内の工場に対しては、地方への移転や分散に踏み切らせるねらいから税制上特別の負担を求めるようにする。他方では、太平洋ベルト地帯以外の地域へ工場を移転ないし新設する企業に対しては、固定資産税の長期免税など税制上の特別措置をとるほか補助金を出して手当てをする。また地方公共団体に対しては、固定資産税免除にともな

う歳入減少について、過密地域であがる税金を財源として第二地方交付税的なやり方で補てんする。「これは、禁止税制と誘導税制の導入であり、集積の利益を求める工業の流れを認めてきた産業政策の大転換である。」

3, 官民協調路線

「地方開発にしても、大都市の改造にしても、民間の力だけで取組める問題ではないが、政府の力だけでやろうとしてもできない。民間の資金、技術、バイタリティを税制や利子補給などによって上手に制御しながら活用すれば、非常に大きな力を発揮することが期待できる。」

「そのためには、まず政府が自らの責任でやるべきことはなんであるかを明確にし、やるべきことはやらなければならない。しかし、その他のものは、公共性と収益性の兼合いに応じて政府、民間の協力・協業を考えたり、民間にまかせて適切な制御と助成を行なう。このような多くの方式をうまく組合わせて、新しい官民協調路線を確立したい。」例えば、地域開発では、官民協同の第三セクターが積極的に活用されているが、これは注意深く育てていきたい。

あとがき

本書は、日本列島改造の「処方箋」であり、それを「実行に移すための行動計画」である。そのねらいとするところは「人口と産業の地方分散」、いわゆる「工業再配置と交通・情報通信の全国的ネットワークの形成をテコにして、人と金と物の流れを巨大都市から地方に逆流させる地方分散」を推進することにより、「過密と過疎の同時解消」をはかろうとするものである。田中内閣の発足により『日本列島改造論』は、現実の政治日程となってきた。政府が都市問題をとりあげるのは、明治以来はじめてのことである。

『日本列島改造論』について松下圭一氏はつぎのように評している。「田中構想は、歴代保守内閣が伝統的に言葉だけでも『福祉国家』をかかげたのに対して、この福祉国家を『国土改造』へと組替えていくことによって、ふたたび生産基盤の拡大を指向しているところに特異性がある。」それは、経済の進路を「GNPの数字」から「国土改造の地図」に転換したものである、という。

（社会学部助教授　こたに・せつお）

（日刊工業新聞社・五〇〇）

編集後記

人間の正しい思想は生産闘争、階級闘争、科学実験という三つの社会的実践の中からのみ生まれる。

これは「ロング・マーチ」と世に言われる、すさまじくも崇高な行軍に、「人間」があらん限りの意志力を発揚して不可能に挑んだ極限のドラマを、生き抜いてきたさる現代の偉人の言葉である。

秋深まり、書物を紐解き、虫の音の中に眠り込めば、少しでも人生の機微がわかり、更には普遍的真理をも体得できるというのだろうか。否、無理だろう。私達こそ、書斎から出て実際の生活に手を汚さなければ本当のものは何一つ手に入れることはできまい。もういいかげん、擬制の大学像、大学生活から抜け出し、毎日を妥協の存しない天か地かという酷しい戦いの中に生き、主体的な思考方法の確立、実践にのめり込んでいかなければならないのではないか。

世の中を批判的に捉え、安易に与えられるものについては、その享受を拒絶し、自身に反問しながら、独創の世界めざす「ロング・マーチ」にいざ旅立たん。

秋まさに来ぬ。

塑像群像《収租院》について

大型塑像群像《収租院》（小作料取立て所）は、解放前の中国四川省大邑県の極悪地主劉文彩を相手にくりひろげられた、農村ではげしい階級闘争を深刻に、いきいきと、ありありと再現したものである。

NRの会加盟出版社

(ABC順)

亜紀書房　東京都千代田区神田神保町１－51　(03)294－0087
風媒社　名古屋市中区不二見町７－１　(052)321－3917
現代ジャーナリズム出版会　東京都新宿区市ケ谷田町２－５　(03)269－7697
合同出版　東京都千代田区神田神保町１－52　(03)294－3506
季節社　東京都品川区小山７－16－３　(03)781－8346
せりか書房　東京都文京区後楽２－20－15　(03)813－8566
新泉社　東京都文京区本郷２－15－20　(03)812－1662
田畑書店　東京都港区赤坂４－８－19　(03)403－5819

現代革命論への模索

廣松　渉著

46判・上製美装
340頁850円

旧左翼はいまや体制内存在と堕して、マルクス主義革命論のロゴスとパトスそのものを〝風化〟させた。本書は共産主義革命論の原点に立ちかえると共に、現代資本主義の〝変貌〟をも見すえて、激動の七〇年代の初頭にあたり、現代革命論の再構築への礎石を投じた労作である。

〈主要目次〉
序説　新左翼革命運動の存在理由
第一部　新左翼革命路線の史的位相
第一章　マルクス主義革命論の第一段階
第二章　「第一段階」から「第二段階」へ
第三章　「第二段階」から「第三段階」へ
第二部　新左翼革命理論の課題状況
第一章　資本主義の〝変貌〟と現代革命
第二章　旧左翼の隘路と新左翼のコース
第三章　武装大衆叛乱型革命路線の模索
付「疎外革命論」の超克に向けて

父親なき社会

●社会心理学的思考

ミッチャーリヒ著
小見山　実訳

A5判・並製美装
360頁2000円

フロイトの精神分析の正統をつぐ立場に立つ著者が、現代生物学や社会学の成果を十分にとり入れ、現代社会が個人に及ぼす影響をその心理行動にまで掘りさげてするどく洞察した現代文明批判。かつて父権主義社会では父親像が権威構造の基礎をなし、生活の規範はすべて父親の具体的な働く姿を通じて息子に伝えられたが、現代では父親の労働そのものが断片化されたり、管理的になったりして、父親像は消滅して自己定位が難しい状況が出現している。その混乱と模索の姿を追求する。

明治社会主義資料叢書

●全7巻

監修＝荒畑寒村
編集＝太田雅夫

46判・上製美装
平均350頁
平均1500円

1 社会主義協会史　10月刊
2 予は如何にして社会主義者となりし乎　9月刊
3 社会主義遊説日記　11月刊
4 平民文庫作集　上巻　1500円　発売中
5 平民文庫著作集　中巻　1500円　発売中
6 平民文庫著作集　下巻　1500円　発売中
7 「平民新聞」「直言」英文欄対訳　明春刊

内容見本送呈

住谷悦治氏評　編集された稀観の諸資料は、わたくしらはバラバラに、しかもその一部分しか見ることが出来ず、個人の書架にまとまって備えられることなどは殆んど不可能であると思われるのに、このように七巻の中に鳥瞰することができるとは思いがけないことであった。この資料叢書が広く研究者の書架に備えられることを望んでやまない。

新泉社

＊東京都文京区本郷2—15—20　振替　東京160936　☎03—812—1662